『発心集』の泣不動説話

木下華子

はじめに

鴨長明の手に成る仏教説話集『発心集』は、流布本・異本ともに、いわゆる泣不動説話を収める。三井寺の僧・智興が重病に陥った際に、陰陽師安部晴明の勧めで弟子の証空阿闍梨が師の身代わりとなって病苦を引き受けるが、証空の守り本尊であった不動尊（絵像）が更に証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かるというものだ。

当該説話は、平安時代末期から鎌倉・室町時代にかけて様々な作品に登場しており、広く流布したものと考えられる。本稿では、一連の泣不動説話群において『発心集』の当該話がどのような位置にあるのか、さらに神宮文庫本に代表される異本系の本文がいかなる意図の下に作り出されたのかを考察したいと思う。

一　『発心集』収載の泣不動説話

『発心集』における泣不動説話は、流布本では慶安四年板本・寛文一〇年板本ともに巻六―一、異本では神宮文庫本・山鹿積徳堂文庫本ともに巻三―一に配置される。両者の本文には、文脈に関わるような大きな差はないが、異本系の本文は、流布本には見えない和歌一首を持つ。この点を鑑み、本稿では神宮文庫本の本文をもとに、当該説話の位置を考えることとする。以下に全文を引用する（濁点・カギ括弧等を補うなど、任意に表記を改めた箇所がある。また、本文中の傍線・符号などは全て稿者による）。

証空阿闍梨、師匠ノ命ニ替ル事

A中比、三井寺ニ^{a}智空（興イ）内供ト云フ尊キ人有ケリ。年闌（タケテ）如何ナル宿業ニテカ有ケン、世ノ心地ヲシテ限リナリケレバ、弟子共

集テ歎キ悲ム。其時、晴明(セイメイ)ト云テ神ノ如クナル陰陽師(ヲンヤウジ)有ケリ。是ノ病(ヒ)ヲ見テ云フ様、「此度コソ限リ有ル定業ナレ。如何ニモ不レ可レ叶フ。但シ、其レニ取リテ志シ深カラン弟子ナドノ彼ノ命(ヒ)ニ替ラント思フ人ト有(ヒ)ラバ、祭リ替奉リテン。其外ハ力(ラ)不ト及ナン」云ヒケル。多ク弟子共サシツドエル程ニ、此事ヲ聞ク。智空内供、苦ミノタヘガタキマヽニ、「若シ替ラント云フ者ヤ有ル」ト、双居タル弟子ドモノ気色ヲ見レバ、詞ニコソ云イタレ、真ニハ捨テ難キ命ナレバ、b皆々色ヲマサヲニナシテ、キモツブラシ目ニ成テ、一人トシテ「我レ替ラン」ト云フ人無シ。

B爰ニ証空阿闍梨ト云人、トシ若クテ弟子ノ中ニ有リ。弟子ニ取リテモ末ノ人也。誰モ思ヒ寄ヌ所ニ、進出テ内供ニ云フ様、「我レ替リ奉ント思フ。其謂ハ、法ヲ重クシテ命ヲ軽クスルハ、師ニ仕フル習也。争カ此事聞ナガラ身命ヲ惜マン。徒ニ捨ベキ身ヲ、今三世ノ諸佛ニ奉ツテ、人界ノ思ヒ出ニモセン。但、八十ニナル母侍リ。我レヨリ外ニハ子無シ。若シ、ユルサレヲ不ンバレ蒙ラ、自身ヲ捨ルノミニ非ズ、二人ガ命尽スベシ。能々理リヲ申聞セテ暇ヲ請テ帰参ラン」ト云テ、座ヲタチヌ。内供ヨリ始テ諸ノ弟子ドモ、泪ヲ流シテ憐ム。

C証空、母ノ許ニ至テ此事ヲ語ル。「願ハ歎キ給事無レ。縦ヒ御跡ニ残リ居テ、後世ヲ訪ヒ奉トモ、是程ニ大キナル功徳ヲ作クラン事ハ有難シ。今ノ師ノ恩重シテ其命ニ替ラン事、三世ノ諸仏モ哀ミ給ヒナン。天衆地類モ驚キ給フベシ。c其功徳ヲ統(フサネ)テ、母ノ後世菩提ニモシ奉ラン。是レ誠ノ孝養ナレバ、則アヤシキ身一ヲ捨テ、二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン。況ヤ老少不定ノ世界也。若シ、徒ニ命尽テ、母ヨリ先事(サキダツ)モヤ有ン。其時ハ、悔テモ何ノ甲斐カ有ン。何ヲカ此世ノ思出ニセン」ト泣々申ス。母此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲ム。「我レ、愚カナル心ニハ、功徳ノ大キナル事モヲボエス。君ヨウチナリシ時ハ我ニ育(ハゴ)クマレキ。我年闌テハ君ヲタノム事天ノ如シ。然ルヲ、残ノ命今日トモ明日トモ知ヌ時ニ至テ、我ヲ捨テ先立ン事コソ最悲シケレ。然レドモ、其志ノ深事ヲ思ニ、師ノ命ニ替リナバ君ガ後世ニ至リテモ疑ベカラス。若シ此事免(ユルサズハ)佛モ愚カ也ト見玉ヒ、君ガ心ニモ違ヌベシ。誠ニハ老少不定ノ世也。思ヘバ夢幻シノ前后也。早ク君ガ心ニ任(マカ)ス。トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。

d如何ニセン蓮ノ露トナルベクハ別レノ涙色深(ク)トモ

D其時、証空泣々悦テ帰ヌ。則チ名乗ナド書付テ、晴明ガ許ヘ進ツ。今夜命ニ替リ奉ルベキ由ヲ云ヘリ。カクテ夜漸ク深ケ行程ニ、此証空、頭痛ク心地悪ク、身ホトヲリテ堪難ク覚ウレバ、

我房ニ行テ見苦シカルベキ物ナド取調ツ、、年来持チ奉リケル絵像ノ不動尊ニ向ヒ奉テ申ス様、「年若ク身盛ナレバ、命チ惜カラヌニハアラザレドモ、師ノ恩ノ深事ヲ思ニ依リテ、今已ニ彼命ニ替リナントス。然ルニ、勤メ少ナケレバ、極メテ後世恐ロシ。願クハ、大聖明王哀ヲ垂レ給テ、悪道ニ落シ給フ十ナ。重病已ニ身ヲ責テ、一時モ堪ヘ忍フベカラズ。本尊ヲ拝ミ奉ラン事、只今計也」ト泣々申ス。

E其時、絵像ノ御目ヨリ血ノ涙ヲ流シ給ヒテ、「汝ハ師ニ替ル。我ハ又汝ニ替ベシ」ト宣ベ玉フ。御声、骨ニ通リ肝ニ染ム。アナイミジ、掌ヲ合テ念ジ居タル間ニ、汗流ヌル身サメテ、則サワヤカニ成ニケリ。

F内供ハ其夜ヨリ心地ヨク成ケレバ、此事ヲ聞テナノメナラズニ覚テ、後チニハ餘人ニモ勝レテ、タノモシク思ハレタル弟子ニテ侍ル也。

Gサテ、彼本尊ハ伝ワリテ、後ニハ白河ノ院ニヲハシケリ。常住院ノ泣不動ト申ハ是也。御目ヨリ涙ノコボレタル方ノアザヤカニ見ヘ給ケルトゾキコウ。

Hサテ、証空阿闍梨ト云ハ、空也上人ノ臂ノ折レ給ヒタリケルヲ、餘慶僧正ノ祈リ直シ給タリケル時、法器ノ者ナリトテ、空也上人ノ奉ラレタリケル証空也。

当該話の梗概は以下の通りである。A三井寺の僧・智興が重病になった際、安部晴明が「身代わりの僧を出して病を移し替える以外に、智興が助かる術はない」と診断する。Bただ一人、智興の弟子である証空阿闍梨が身代わりを申し出る。ただし、証空には八十になる母がおり、老母に道理を言い聞かせて暇乞いをしたいと言う。C証空は老母に懇ろに別れを告げ、老母は泣く泣く納得して証空を送り返し、一首の和歌を詠んだ。D帰参の後に、証空は晴明の祈祷によって師の病をその身に引き受ける。病苦の余りの耐え難さに、証空は長年、守り本尊としていた絵像の不動尊に向かい、一身に祈った。Eその時、不動尊は血の涙を流し、自分が証空の身代わりになるという声が響き、証空・智興ともに助かる。F智興は、これより後、証空を重用した。Gその絵像は、後に白河院に伝わり、今は常住院の泣不動と呼ばれているもので、絵像の目から涙がこぼれた様子も鮮やかにうかがわれるということだ。Hこの証空は、空也上人の骨折した臂を余慶僧正が祈祷で治した際に、法器の者だとして空也が余慶に送った人物である。

二　流布本と異本の本文について

『発心集』において、流布本と異本の本文は、どちらかが古態性が強いとすることは難しく、異同の箇所によって性質が異なるのが実状である。今回、神宮文庫本すなわち異本系の本文で考察するにあたり、流布本との異同で目立つところを検討しておこう。なお、以下の四箇所において、異本系の一本である山鹿積徳堂文庫本は、神宮文庫本と同じ本文を持つことを付記しておく。

[1]「智興」の名について、神宮文庫本は本行本文で「智空」と表記し、最初に「智空」が登場するAの冒頭では「空」の右に「興イ」と傍書する（傍線部a）。慶安四年板本は「智興」である。神宮文庫本ないしはその親本の段階で、『発心集』の他の書写本との校合が行われていたことを示す例だが、『発心集』に先行して泣不動説話を収める『宝物集』なども「智興」と表記するため、もとは「智興」だったものがどの段階かで誤写されたと考えられる。従って、この箇所は板本のほうが古態をとどめていよう。本稿でも、以下、「智興」で話を進める。

[2]　Aの最後、智興の弟子たちが師の身代わりとなることに怖じ気づく箇所（傍線部b）では、

・皆々色ヲマサヲニナシテ、キモツブラシ目ニ成テ（神宮文庫本）

・各色ヲツクリテフシ目ニ成ツ、（慶安四年板本）

となっている。皆が顔色を変えたという前半部は、「顔色を真っ青にして」という意の本文を持つ神宮文庫本に対し、慶安四年板本は「化粧する」「顔作りをする」という「色ヲツクリ」となっており、意味が通じない。「怖じ気づいて色を変じたその顔を整えて」という意味に解釈できないこともないが、そうすると後半の「フシ目ニ成」ったとのつながりが希薄になる。また、「色を作る」という表現そのものは、江戸時代の浮世草子あたりから用いられる語であり（注1）、中世に遡る用例を見いだせない。「顔色を変じる」という意の「色を作す」という表記が「色を作る」に変化した可能性もあるが、「色を作す」場合、通常は怒りの文脈で用いられるため、こちらも不審だ。後半部に目を移すと、神宮文庫本の本文は「肝をつぶしたような目」という意で解釈できるが、「ツブラシ目」という他に例を見ない表現となっており、神宮文庫本以前の段階での誤写が疑われる。板本は「伏し目になった」で意味は通りやすいが、整合性を付けた本文と考えることもできようか。この箇所は、神宮文庫本のほうに古態が見出せるように思われる。

[3] Cの、証空が老母に師の命に替わるという大きな功徳を母の後世菩提に廻向したいと言う場面で、神宮文庫本は「其功徳ヲ統テ」（傍線部c）、慶安四年板本は「其功徳ヲカサネテ」である。「束ねる」「総合する」という意の「ふさぬ」は、古くは「朕総ネ臨ミテ而御寓」（日本書紀・孝徳天皇白雉元年）などと用いられるが、平安時代以降の用例は少なく、管見では以下のようなものがある。

・東や香山の山に熟るなる花橘を八房ふさねて手に取ると夢に見つ　（梁塵秘抄・四五三）

・さまざまに掌なる誓ひをば南無の言葉にふさねたるかな　（山家集・一五四一）

・伊豆国伊東・河津・宇佐美、この三ヶ所をふさねて、　（曽我物語・巻一）

・出羽の国十二郡を総ねて、両国六十六郡にて候。　（義経記・巻一）

・その上、天下の公物とて立てられたるは和歌、筆道、有職、この三つの外なし。これをふさねて家になりたる人、貫之、又定家等なり。（雲玉集・序）

・……かしこきや　君の国内の　まつりごと　ふさねまをせる臣たちの……（八十浦乃玉・三一四・尾関正義）

対して、板本の「カサネテ」の場合、用例は数多あり、文意も取りやすい。どちらが先行するかということは定め難いが、『発心集』当該話を出典とする『三国伝記』巻九―六では、この箇所は「惣」と記される。神宮文庫本の「統テ」は、少なくとも中世の読みを反映した本文だと判断できよう。

[4] Cの末尾、神宮文庫本は「如何ニセン蓮ノ露トナルベクハ別レノ涙色深ックトモ」（傍線部d）という和歌一首を載せる。板本はこの和歌を持たない。他の泣不動説話のうち、当該歌を持つのは、『不動利益縁起』（東京国立博物館本、鎌倉時代成立）のみである。そもそも存在した和歌、しかも数首の連続の中に置かれたわけではない一首のみの和歌が、転写の過程で脱落するとは考えにくい。先述の『三国伝記』巻九―六も当該和歌は持たないため、中世における『発心集』の伝本には、和歌がないタイプのものが確実に存在したと思われる。当該歌を持つ『不動利益縁起』は、室町期書写の神宮文庫本よりも成立が早いことを併せると、泣不動説話が様々な作品の中で流布していく過程において、和歌が増補された形が作られ、その和歌が神宮文庫本に流入したと考えるのが妥当ではないだろうか。

以上、[1]～[4]の異同を見たが、異本と流布本のどちらかが古態性が強いとは断言できない。先行研究と同じ見解に

留まるが、当該説話においても、異本・流布本はそれぞれに古態を残しているということを、改めて確認しておきたい。

三　泣不動説話の成立と展開

『発心集』以前、すでに泣不動説話は流布していたと考えられる。その成立と展開については簗瀬一雄・南里みち子・中前正志らの各氏によってかなり明確な道筋が示されているが(注2)、それらを参看しつつ、『発心集』に至るまでの泣不動説話がいかなるものであったのかを見ておこう。

平安時代から室町時代にかけての同話・類話・引用をおおよその成立時期によって並べると、次のようになる。

①『今昔物語集』巻一九―二四［保安元年（一一二〇）頃か］
②『宝物集』（三巻本では巻中、七巻本では巻四）
［治承三年（一一七九）以後数年間］
③『発心集』巻三―一（神宮文庫本）、巻六―一（流布本）
［建暦四年（一二一六）までに成立］
④『三井往生伝』［建保五年（一二一七）七月書写］
⑤『雑談抄』［弘安八年（一二八五）の書写奥書を持つ］
⑥『八幡愚童訓乙』［正安年間（一二九九～一三〇二）頃の成立か］
⑦『とはずがたり』巻一・巻五［徳治元年（一三〇六）頃成立］
⑧『不動利益縁起』［東京国立博物館蔵本、鎌倉時代製作とされる］
⑨『元亨釈書』巻一二［元亨二年（一三二二）成立］
⑩『真言伝』［正中二年（一三二五）成立］
⑪『曽我物語』巻七［南北朝時代頃の成立か］
⑫『園城寺伝記』六［一三三〇～四〇年代の成立か］
⑬『寺門伝記補録』第一五
［応永年間（一三九四～一四二八）成立］
⑭『三国伝記』巻九
［応永十四年（一四〇七）～文安三年（一四四六）成立］
⑮謡曲『泣不動』
⑯『塵添壒嚢鈔』［天文元年（一五三二）成立］

先行研究が示す通り、実に「知名度の高い説話」であることがわかるが(注3)、本稿では特に『発心集』に先行して成立する①『今昔物語集』②『宝物集』と、書写時期は『発心集』に少し遅れるが説話自体は先行していたであろう④『三井往生伝』を中心に整理を行うこととする。それぞれの話の流れと相違点は、次頁の表のようになる（A～Hは、第二節において、『発心集』の内容を整理した際の符号に一致）。

	A	B	C	D	E	F	G	H
①『今昔物語集』	高徳な僧が重病になり、安倍晴明が「身代わりの僧を出せば、泰山府君に起請して助かるかもしれない」と勧める。	多くの弟子が黙る中、一人の弟子が身代わりを申し出る。		晴明が都状に弟子の名を記して祭ると、師僧は快復し、弟子も無事だった。	〈編者の評〉これは、身代わりとなった弟子の僧の心を、泰山府君が哀れんだからだろう。	師僧は弟子の僧をかわいがり、重用。		
②『宝物集』	三井寺の智興が重病になり、安倍晴明が、「身代わりの僧を出せば、祭り替えることで助かるかもしれない」と勧める。	多くの弟子が黙る中、証空が身代わりを申し出る。	証空は、老母に暇乞いに行って事の次第を話すが、母は許さず。証空は、生死輪廻の次第を説いて、泣きながら寺へ戻る。	晴明が祭り替えると、証空は病苦に責め苛まれる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。			
③『発心集』	三井寺の智興が重病になり、安倍晴明が、「身代わりの僧を出せば、祭り替えることで助かるかもしれない」と勧める。	多くの弟子が黙る中、証空が身代わりを申し出る。	証空は、老母に暇乞いに行って事の次第を話すと、母は泣く泣く納得。証空に自らの往生の引導を頼み、和歌を詠む。証空は、泣きながら悦び、寺へ戻る。	晴明が祭り替えると、証空は病苦に責め苛まれる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないでほしい」と泣く泣く訴えると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	智興は証空をかわいがり、重用。	絵像の不動尊は、後に、白河院・常住院と伝来。	証空は、空也が余慶に送った人物である。
④『三井往生伝』	智興が重病になり、安倍晴明が、「身代わりの僧を出せば、病を移し替える秘術によって助かるかもしれない」と勧める。	証空が身代わりを申し出る。	証空は、老母に暇乞いに行って事の次第を話すと、母は愁えることなく賛同。証空は、泣きながら母の家を辞し、寺へ戻る。	晴明が術を施すと、証空は病を得、師（智興）は快復した。	証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無帰命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えると、絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。			

表を見ると、①と②③④には大きな違いがある。それは、（1）「三井寺」「智興」「証空」という説話の場と登場人物の個人名の有無、（2）不動尊の霊験譚であるかどうか、（3）証空の老母の存在の有無、である。

まず（1）であるが、②③は、棒線部のように「三井寺」「智興」「証空」という説話の場と登場人物の個人名を明記する。④は三井寺内部で作られた寺門の往生伝であるから、具体的な語がなくとも、場が三井寺であることは明らかだ。①『今昔物語集』は、「今昔、□ト云フ人有ケリ。□ノ僧也」として、他作品が「三井寺」「智興」とする箇所を欠字にする。「安部晴明」の名はあるのだが、「証空」についても「年来其ノ事トモ無クシテ相副ル弟子」として個人名は記さない。『今昔物語集』がわざわざ欠字にしたということは、編者が後に調べて補記しようと考えていたことを示す。ならば、「三井寺」「智興」「証空」の説話として存在していたものが、①の段階で固有名が落ちたとは考えにくい。先行研究が指摘するよう（注4）、後に「泣不動説話」となる話の源流は、『今昔物語集』に見えるような固有の場や人物を伴わない安部晴明の呪術説話であった可能性が高いだろう。

（2）についても（1）と同様、①と②以下では奇跡の位置づけが大きく異なる。①は、「此ヲ思フニ、僧ノ師ニ代ラムト為ルヲ、冥道モ哀ビ給テ、共ニ命ヲ存シヌル也ケリ」として、弟子の僧が助かったのは冥界の神である「冥道」（泰山府君）の哀れみによる奇跡だとするのに対し、②③④では波線部のように不動尊の霊験譚となる。天台宗寺門派の祖・智証大師円珍は、不動明王信仰に篤く、その教学や思想において不動明王信仰が重要な位置を占めていたことが知られ（注5）、円珍が承和五年（八三八）に感得したとされる不動明王像（いわゆる黄不動像）は秘仏として三井寺に現存する。三井寺は、日本における不動信仰の一大拠点であり続けた。そのような宗教的背景を持つ三井寺の内部か近辺に①のような説話が取り込まれて成長する際に、不動尊の霊験譚として位置づけ直されたのだろう（注6）。これと軌を一にして、説話は三井寺の僧である智興や証空という固有の存在を伴った形になり、それが喧伝とともに外部へと広まったと考えられる。

（3）の証空の老母についても、（1）（2）同様、①には無く、②以下に存在する要素である。これも、三井寺における不動尊の霊験譚として説話が位置づけられる過程で、新たに付け加わったのだろう。この老母については、②③④の中で、性格に違いが見られる。②③では老母は証空が命を落とすことを悲

しむのだが、④では母は証空の決断を悦ぶ存在になっているのだ。

まず、「悲しむ母」であるが、②『宝物集』は、「母、此事ヲ聞テ、全クユルス事無トイヘドモ」（三巻本・七巻本[注7]）となっており、母は証空の決意を許さない。これは、子に先立たれる悲しみ故に証空を制していると推測されよう[注8]。③『発心集』の母は、「此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲」しんだ後に、納得することになる。⑤以下では、このような「悲しむ母」が登場するものに、

⑧母これを聞きあえず、夢の心地して地に臥□、涙を流してぞ叫びける。（不動利益縁起）

⑪母聞もはてず、証空の袖に取つき、「思ひもよらず、師匠の御恩ばかりにて、母があわれみをばすてたまふべきか。御身をのこし、みづからさきだちてこそ、順次なるべけれ、思ひもよらぬ例」とて、証空の膝にたふれかゝり、涙にむせぶばかりなり。（曽我物語）

⑭母此ノ事ヲ聞テ涙流テ驚キ悲テ云ケルハ、（三国伝記）

がある。

続いて「悦ぶ母」だが、④『三井往生伝』が、「母聞不レ愁、還有二勧意一」とするのをはじめとして、

⑤母云、「不レ及二左右一。早可レ奉レ替」云々。（雑談抄）

⑨母曰、「我老命在二旦暮一、唯憑レ汝。汝其先レ我乎。然思、汝生替レ師。雖レ死不レ遺二妾於地下一矣。如二汝勇勤一。我欽二歆之一」。（元亨釈書）

⑫母聞不レ愁、還作二随喜一。（園城寺伝記）

となっている。このように、②③と④に見える母の人物造型の違いは、後続の作品群にも受け継がれていることがわかる[注9]。この点に関しては、「不動の涙」の形態移行をつぶさに分析した中前正志の「不動の涙――泣不動説話微考――」が参考になる[注10]。中前は、不動尊の流す涙の性質に注目し、泣不動説話における不動の涙が、証空の病苦を身代わりとして引き受けた「病悩苦痛の涙」と、証空の志に動かされた「感動哀憐の涙」という二系統に分類されることを見出した。「病悩苦痛の涙」の形を取る明らかな作品は、「如レ有二病気一自レ眼出レ涙連々不レ止」とする『三井往生伝』をはじめとして『元亨釈書』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』であり、確定はできないが解釈上の可能性があるものとして『雑談抄』『真言伝』と謡曲『泣不動』がある。対して、『宝物集』『発心集』『泣不動縁起絵巻』『三国伝記』には、不動尊が病を引き受けたとする表現は存在せず、その涙は証空の志に対する「感動哀憐の涙」であった[注11]。

本来、不動尊の霊験譚としての身代わり説話であれば、身代わり・代受苦の証がその像に何らかの形で残されるというのが伝統的な定型であり、前者はまさしくその定型に則っている。しかし、後者のように、不動尊の涙が感動哀憐によるものであれば、身代わり説話としての定型は欠落し、話の重心は証空の殊勝な志や母との別離に傾くことになる。泣不動説話の重心を、前者のような純粋な不動の霊験譚（身代わり説話）に置くことを望むのは、三井寺の内部・近辺であろうし、実際、前者を収める作品群は、後者に比べて圧倒的に三井寺関係のものが多い。泣不動説話の発祥・伝承の場が、不動信仰の一大メッカである三井寺であることを鑑みると、不動の涙の形は、そもそも「病脳苦痛の涙」として三井寺の内部・近辺で出発し、後に寺外において「感動哀憐の涙」へと展開したと考えられる。これが、当該論文の結論である。

話を老母の人物造型に戻そう。「悦ぶ母」の形を取る作品群を見渡すと、中前の指摘する「病脳苦痛の涙」を流す不動尊を描く作品群とほぼ重なることに気付く。作品が成立した場については、④『三井往生伝』⑫『園城寺伝記』はもとより、⑤『雑談抄』も三井寺関係の雑録である。つまり、「悦ぶ母」の造型もまた、三井寺内部・近辺で行われた可能性が高いということだ。師の命に替わるという行為は仏法を重んじ、大きな功徳を作る善行である。子を失う悲しみの余りに泣いて善行を止めるのではなく、悦んで背中を押す母こそが、本来望まれるものだったのではないか。対して、子が先立つことを嘆き「悲しむ母」は、一世一代の善行を遂げようとする証空の絆しとなってしまう。仏教上望ましいものではないが、子を思う一般的な母の姿でもあろう。そのような「悲しむ母」の造型が育つのは、不動尊が「感動哀憐の涙」を流し始める三井寺の外が相応しい。母が悲しめば悲しむほど、証空の志は殊勝なものになり、それに打たれた不動尊の涙は「感動哀憐」のものになるからだ。すなわち、母の造型も、三井寺内部・近辺における「悦ぶ母」から、寺外における「悲しむ母」へと移行していったものと考えられよう。

以上、（1）～（3）で検討したことをまとめると、泣不動説話とは、『今昔物語集』に見えるような安部晴明の呪術説話を素材として、それが三井寺内部・近辺において不動尊の霊験譚へと成長し、智興・証空という固有の存在に託されて成立したものと考えられる。その説話が寺外に流布する過程において、「不動尊が証空の病脳を引き受けて苦しみの涙を流す」という身代わり説話の定型が崩れ、「不動尊が証空の殊勝な志に感動

して哀憐の涙を流す」形へ展開した。これと同様に、寺内・近辺では、証空の決意を悦び背中を押す存在であった母が、子に先立たれることを嘆き悲しむ母へと移行したと思われる。

ここから、『発心集』所載の泣不動説話の位置を考えると、

(1)「三井寺」「智興」「証空」という固有の場と人物の話である。

(2) 不動尊の霊験譚である。

(3) 証空の老母が「悲しむ母」として登場し、不動尊は「感動哀憐の涙」を流す。

という特徴を備えた当該説話は、三井寺の外で展開した形――現存する先行作品の中では『宝物集』型――を享受したものと判断することができる。

四 『発心集』の特徴（一）

『発心集』の泣不動説話は三井寺外で広まった話型を受け継いでおり、先行する作品としては、すでに『宝物集』が存在する。ただし、両者の泣不動説話には同文性はほとんど見られず、『発心集』当該話の直接の出典が『宝物集』だったとは言い難い。しかし、『発心集』における『宝物集』との共通話は、流布本系では全一〇二話中一一話、異本系では全六二話中七話となっており、およそ一割の説話が重なることになる。『宝物集』を直接の出典と考え得る話もあることが指摘されており（注12）、鴨長明が『発心集』を編む際の素材とした先行書の中に『宝物集』があったことは疑いもないだろう。そのような状況を鑑みれば、泣不動説話の話型そのものについては、『発心集』が大きく手を加えたとは言い難い。

前節の表を確認すると、先行の諸書に比して『発心集』のみが持つ要素は、G絵像の不動尊の伝来のルート（証空→白河院→常住院）、H証空の出自（空也が余慶に送った）というものである。

Gに見える、「奇瑞を証明する絵像の不動尊が、三井寺の長吏を輩出する三門跡の一つ「常住院」に伝来し現存する」という伝来の情報は、当該説話の真実味を増すと同時に、三井寺においてこの伝承と絵像の不動尊がいかに重要視されたかを跡付ける役割も果たしている。さらに、そのルートの途中に入る「白河院」（白河に設けられた藤原摂関家の別業で後に白河天皇の御所）の存在は、摂関家や白河天皇という貴顕によって説話内容が保証されたことを意味しよう。後の⑬『寺門伝記補録』において証空は常住院の始祖とされるが、Gは、常住院そのものが泣不動説話を自らの権威付けに用いる過程で生成された可能

性もあろうか。

Hは、証空の出自を明らかにするものだが、それは証空の存在を保証すると同時に、空也・余慶という高名な僧と証空が関わることで、証空の価値を高める役割を果たしているとも考えられる。また、この箇所は、『宇治拾遺物語』下――一四二に収められる空也の臂折れ説話との関連がうかがわれる。空也の折れ曲がった左肘を、余慶（三井寺長吏・延暦寺座主）が加持祈祷で治し、その礼に空也が連れていた三人の聖のうちの一人を送ったというものだが、『宇治拾遺物語』では送られた聖の名は「義観」だ。『打聞集』二六「公野聖事」も同内容の説話だが、聖の名は「起経」となる。小島裕子が指摘するように（注13）、問題は聖の名前が取り違えられたことではなく、空也の臂折れ説話によって、安部晴明・余慶・証空が「霊験あらたかな験者」という要素で繋がることにあろう。晴明については言わずもがなだが、余慶もまた、前述のような著名な験者である。後の作品であるが、⑤『雑談抄』において、証空は加持祈祷によって慶勝証人を蘇生させた「霊験殊勝」な人物であり、彼もまた高力の験者として説話世界に存在した。三井寺は加持祈祷の修法によって多くの貴顕の信頼・尊崇を得、修験道とも関係が深い。そのような宗教的世界への意識が、Hの背後に読み取れるものと思われる。

つまり、GHは、『発心集』以前の段階で流布していた説を『発心集』が取り込んだ可能性も高い。加えて、両者ともに説話内容に直接関わるものではなく、その真実性を保証し、権威付けを行う類いの情報だと考えられるのである。

五　『発心集』の特徴（二）――母の変貌――

ならば、泣不動説話そのものにおける『発心集』の特徴はどこに見出せるだろうか。ここで、Cにおける証空と老母の別離の場面を『宝物集』と比較してみよう。『宝物集』では、

・母、此事ヲ聞テ、全クユルス事無トイヘドモ、生死無常ノ有様ヲコシラヘイヒテ、イソギ帰来テ、已ニ師ニカハル。（三巻本）

・母、此事を聞きて、またくゆるす事なしといへども、生死の有様をいひて、泣く泣くかへり来たりて、すでに師に替はる。（七巻本）

となっており、証空が母を説得する場面は実に簡潔であり、母が証空の言葉に納得したかどうかも明らかではない。さらに、三巻本では「イソギ帰来テ」と証空が帰路を急ぐ様が記され、

その心が母よりも師・智興に傾いていることが読み取れる。七巻本では、そのような急ぐ様子は消えており、証空は泣く泣く母の許から帰ることになるが、この涙は、母の理解を得られた安堵の涙とは解しがたい。母に先立つ不孝の悲しみ故の涙と捉えておくのがよいだろう（注14）。

対して、『発心集』はどうだろう。証空が母を説得する言葉は、

願ハ歎キ給事無レ。縦ヒ御跡ニ残リ居テ、後世ヲ訪ヒ奉トモ、是程ニ大キナル功徳ヲ作クラン事ハ有難シ。今ノ師ノ恩重シテ其命ニ替ラン事、三世ノ諸仏モ哀ミ給ヒナン。天衆地類モ驚キ給フベシ。其功徳ヲ統（フサネ）テ、母ノ後世菩提ニモシ奉ラン。是レ誠ノ孝養ナレバ、則アヤシキ身一ヲ捨テ、二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン。況ヤ老少不定ノ世界也。若シ、徒ニ命尽テ、母ヨリ先（サキダツ）事モヤ有ン。其時ハ悔テモ何ノ甲斐カ有ン。何ヲカ此世ノ思出ニセン。

であり、『宝物集』に比べるとその長さ・詳しさは圧倒的である。話の内容も、「自分が師の命に替わるならば、三世の諸仏も自らを哀れむだろうし、大きな功徳を作ることになる。それで母の後世を救うことができるのだから、これこそが真実の孝養だ。師の命に替わるならば、自分一人の命で師と母と二人に恩を報じることができるが、自分が何の功徳も作らずに母に先立ってしまったら、母の後世を救うことはかなわなくなる」というものであり、自らの行為が母を浄土に導くことになると訴え、母を安心させようとしていることがうかがえよう。また、証空の台詞には、「二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン」というものがあるが、この時、母と師・智興は等価であるように受け止められようか。つまり、『発心集』においては、母の存在が実に大きいものになっているのである。

続いて、母の言葉に目を向けてみよう。『宝物集』は母が納得したかどうかには全く触れないが、『発心集』は証空の語りかけに答える母の台詞を用意している。

母此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲ム。「我レ、愚カナル心ニハ、功徳ノ大キナル事モヲボエス。君ヨウチナリシ時ハ我ニ育（ハゴ）クマレキ。我年闌テハ君ヲタノム事天ノ如シ。然ルヲ、残ノ命今日トモ明日トモ知ヌ時ニ至テ、我ヲ捨テ先立ン事コソ最悲シケレ。然レドモ、其志ノ深事ヲ思ニ、師ノ命ニ替リナバ君ガ後世ニ至リテモ疑ベカラス。若シ此事免（ユルサズハ）佛モ愚カ也ト見玉ヒ、君ガ心ニモ違ヌベシ。誠ニハ老少不定ノ世也。思ヘバ夢幻シノ前后也。早ク君ガ心ニ任（マカ）ス。トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。

涙を流す母は、余命幾ばくもない老齢の自分を捨てて我が子に

先立たれる悲しみを語るが、同時に、証空の志の深さ・師の命に替わる功徳によって証空が浄土に往生することを理解している。そして、「お前の思うようにせよ」と証空の背中を押し、自らの後世を救うように頼むのである。だからこそ、続くDの冒頭、寺への帰途につく証空は、「泣々悦テ帰ヌ」と記されるのだ。証空の涙は、母と思いを共有することができた悦びと安堵の涙であろう。

この、母が証空の説得に応えて納得するプロセスの存在こそが、『発心集』の最大の特徴である。『発心集』は、先行する泣不動説話に比べ、母の存在と母子の情愛を最も強めた形になっていると言えよう。証空の行為の仏教的意義を理解し、「早ク君ガ心ニ任ス」と背中を押す母の姿は、第三節の（3）で見た三井寺内部・近辺で発生した「悦ぶ母」の造型を受け継いでいるのかもしれない。しかし、『発心集』の特徴は、享受の先に生成された、母の心情の推移――我が子に先立たれる哀しみに逡巡しながらも、互いの極楽往生を願って自らを納得させ、証空を送り出す――を具に書き出した点に見出すべきだろう。

さらに、第三節で述べたように、『発心集』の不動尊は、証空の志に感じて「感動哀憐の涙」を流す。『発心集』が母の存在と母子の情愛に一つの焦点を結ぼうとしているのであれば、不動尊による奇跡の原動力には、証空の師への思い・仏道への志のみならず、母子が互いを思いやる情愛の深さが据えられているのではないだろうか。

説話の配列を確認してみよう。当該話は、神宮文庫本では巻三―一に位置するが、続く巻三―二「或女房、天王寺ニ参テ、入海事」は、娘を失った母が難波の海に入水し、極楽往生する話であり、この二話は母の子への愛情という点で連続する。慶安四年板本では巻六―一になるが、その前後は、

巻五―一四「勤操、憐栄好事」

母に自分の食事を分けて送っていた栄好が死に、隣の房の勤操は栄好の死を隠して自分の食事を送るが、ある日、その食事が遅れてしまい、栄好の死に気付いた母は頓死。その供養の法事が、後の法華八講の起源となった。

―一五「正算僧都母、為子志深事」

正算僧都の母は、貧しさの中、自らの髪を売って修行する我が子に食事を送っていた。

巻六―一「証空、替師命事」

―二「后宮半者、悲一乗寺僧正入滅事」

ある女房が捨て子だった自分を養ってくれた増誉

僧正の死を悲しむ。

—三「堀川院蔵人所衆、奉慕主上入海事」

堀河院を心から慕っていた蔵人が、院が龍に生まれ変わって西海にいると夢に見て、東風が強く吹く日に海に出て行方知れずになる。

—四「母子三人賢者、遁衆罪事」

兄の妻の間男を弟が殺害。その母と兄（継子）・弟（実子）の三人が互いをかばい、兄弟は赦免。

となっており、母の子に対する慈愛、子の親（と思う恩人）への思い、と親子の関係で話が連続している。神宮文庫本も流布本も、当該話については母子の情愛を核と見て説話の配列を行っていると考えてよい。

『発心集』の泣不動説話は、「不動尊の霊験譚という枠組みを維持しつつも、証空の母の存在を強め、不動尊の奇跡の原動力に母子の情愛を据えるという形で再生されたもの」との位置付けを行っておきたい。その再生が長明個人の所産であるかどうかは断じがたいが、少なくとも、長明が目にしたであろう『宝物集』においては、母の存在は決して大きいものではなかった。如上の特徴が異本・流布本の両本文に共通する以上、この再生ないしは再生された泣不動説話の採録は、編者である長明の意識的な選択だったと考えられよう。

六　神宮文庫本の和歌について

最後に、神宮文庫本が有する和歌一首、「如何ニセン蓮ノ露トナルベクハ別レノ涙色深クトモ」について、多少の考察を試みておきたい。第二節で述べたように、当該歌は、⑧『不動利益縁起』にも見える。

和歌の位置は、Cの末尾であり、母の証空への言葉が「「……トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。」と記された後に、一首が置かれ、「其時、証空泣々悦テ帰ヌ」と後に続く。大意は、「どうしたものだろうか、いや、どうしようもないだろう。いずれは蓮の花の露となって極楽浄土に往生することができるのだから、今、あなたとの別れに流す涙の色が紅に染まったとしても」となる。

神宮文庫本では和歌の詠み手が母なのか証空なのかは明示されない。『不動利益縁起』は和歌の前に、「……さりながら因果をわきまへ心□母なれば、涙をおさへてかくなん」という一文が置かれており、母が詠んだ和歌になっている。内容を見ると、初句の「如何ニセン」は、「どうしよう」という疑問よ

りも、「（涙が紅に染まっても）どうすることもできない」というあきらめを含んだ反語と解釈すべきだろうから、息子に先立たれる悲しみを抑えかねつつも極楽往生の縁だと自らを納得させる母の心情を詠んだものとするのが自然だろう。詠み手は証空の母と考えておく。

一首中に示される「色深」い「涙」とは、悲嘆の涙としての紅涙（血の涙）を意味する。和歌においては古くから詠まれる常套的な表現であるが、いくつか用例を挙げてみよう。

・紅に涙の色は深けれどあさましきまで人のつれなき

（久安百首・六五・崇徳院）

・色深き涙の川のみなかみは人を忘れぬ心なりけり

（山家集・一二八三）

為家元服したる春加階申すとて、兵庫頭家長につけ侍りし

・子を思ふ深き涙の色にいでてあけの衣のひとしほもがな

（拾遺愚草・二七二三）

「色深」い「涙」が、崇徳院・西行詠のように恋の嘆きによる場合もあれば、定家詠のように切なる親心をいう場合もある。当該歌もまた、血の涙を流すほどに深く切実な母の思いを表している。

一首中の表現は、あくまでも「別レノ涙色深ク」である。しかし、この歌から喚起される「紅涙」「血の涙」のイメージは、説話のクライマックスである不動尊の奇跡――「絵像ノ御目ヨリ血ノ涙ヲ流シ」た不動尊が証空の身代わりになる場面――に通じるものであろう。この和歌は、事態を先取り、予言する役割を持つ「予言歌」として捉えることも可能なのである。そして、この和歌の詠み手が証空の母であるということは、母が後の奇跡を予言する役割を担わされていることを意味する。つまり、神宮文庫本の本文とは、母の和歌を挿入することにより、「証空の母の存在を強め、不動尊の奇跡の原動力に母子の情愛を据える」という、そもそもの『発心集』の意図をより強めた形になっている。そのように理解することができよう。

終わりに

以上、『発心集』の泣不動説話を、先行作品との関係および伝本間の異同から読み解いてきた。『発心集』において、証空の母の存在感が増し、母子の情愛が説話の核となった理由の一端を探るならば、同時代に一世を風靡した澄憲と彼にはじまる安居院流の唱導が母の恩愛を重視する説法を行っていたという、宗教的潮流との関係も視野に入ってこようか。亡母追善供

養などの唱導の場において、高僧と母との恩愛物語が多く語られ、母が僧の守護神的役割に据えられていったという唱導の流れ（注15）と、泣不動説話において母の存在が説話の核へと成長するという変化は、軌を一にする可能性があろう。紙幅も尽きるため、これ以上立ち入ることはできないが、『発心集』泣不動説話が成立する背景については、このような見通しを立てて、筆を擱くこととする。

注1　『日本国語大辞典』（第二版）は、初出の用例に、井原西鶴『好色一代男』（一六八二刊）三―三「色つくりたる女、肌には紅うこんの絹物」を挙げる。

2　梁瀬一雄「『泣不動』の説話」（『説話文学研究』、三弥井書店、昭和四九年）、南里みち子「泣不動説話の成立と展開」（『今井源衛教授退官記念文学論叢』、昭和五七年）、中前正志「不動の涙――泣不動説話微考――」（『国語国文』六五―四号、平成八年四月）。

3　三木紀人校注『方丈記　発心集』（新潮日本古典集成、昭和五一年）。

4　梁瀬・南里前掲論文（注2）。

5　中野玄三『不動明王像』（『日本の美術』二三八、至文堂、昭和六一年）、小島裕子「証空の泣き不動伝承の諸相と三井寺の伝承世界」（『仏教説話の世界』、かたりべ叢書三四、平成四年）、中前前掲論文（注2）。

6　小島前掲論文（注5）、中前前掲論文（注2）。

7　『宝物集』の伝本は、一巻本・二巻本・平仮名古活字三巻本・平仮名製版三巻本・片仮名古活字三巻本・第一種七巻本・第二種七巻本と実に多様であるが、小泉弘・山田昭全の先行研究に従って整理すると、一巻本・片仮名古活字三巻本・第二種七巻本の三種を基本とする。一巻本は草稿本、これに大幅な増補と改訂が施されたのが片仮名古活字三巻本であり、そこからさらに増訂されたのが第二種七巻本である。ここまでが著者・平康頼の所産であって、康頼は第二種七巻本をもって『宝物集』の完成本としたとする説が有力。この他の伝本については、二巻本・平仮名古活字三巻本は第二種七巻本の省略本、第一種七巻本は片仮名古活字三巻本・平仮名古活字三巻本・第二種七巻本の三本を江戸時代に至って混合させた本である。本稿では、主として、『発心集』以前に成立を見た片仮名古活字三巻本と第二種七巻本の本文を考察の対象とし、特に断らない限り、片仮名古活字三巻本を「三巻本」、第二種七巻本を「七巻本」

と呼称する。

8　平仮名古活字三巻本の当該箇所は、「母のありけるが、是を聞きて、「八十に余りたる母を振り捨てて先立たん事はいかに」と制しければ」となっている。二巻本も多少の異同はあるがほぼ同文。こちらは、子に先立たれる悲しみ故の制止というはっきりとした表現になっている。

9　⑥『八幡愚童訓乙』⑦『とはずがたり』（以上は泣不動説話の一部引用）、⑩『真言伝』、⑬『寺門伝記補録』、⑮謡曲『泣不動』、⑯『塵添壒嚢鈔』には、証空の老母は登場しない。

10　中前前掲論文（注2）。

11　中前は、「感動哀憐の涙」のパターンに、不動尊が証空に「身代わりに病を受けよう」と告げる前に涙を流すという特徴を見出す。

12　流布本巻二―一一「或上人、不値客人事」・神宮文庫本巻一―一四「或上人、客人ニ不会事」は、『宝物集』と『往生拾因』をあわせ参看して構成したものとする説がある（新潮日本古典集成『方丈記　発心集』頭注）。

13　小島前掲論文（注5）。

14　平仮名古活字三巻本『宝物集』では、当該箇所は、以下のようになる（二巻本・第一種七巻本もほぼ同文）。母のありけるが、是を聞きて、「八十に余りたる母を振り捨てて先立たん事はいかに」と制しければ、証空が云く、「流転三界中、恩愛不能断、菩薩恩入無為、真実報恩者と云要文を引きけり。此の心は、『三界のうちに流転すれば、恩愛絶ゆる事なし。恩を捨てて無為に入る者は、真実の恩を報ずる者なり』と仏の説き給へるなり。されば、親の恩は、三界を離れざる恩愛なり。師匠の恩は三界を離れて無為に入る、真実の恩なり。我すでに師匠の命に替はりなん。此の功力によりて、母も必ず無為の都に入り給ふべし。心やすく思ひ給へ」といひて、たちまちに師匠の命に替はりぬ。証空は「流転三界中……」と、出家時に多く誦される著名な偈文を用いて自らの行為を仏教的に意義付け、その功徳によって母もまた救われると説く。しかし、その言葉は「親の恩は、三界（衆生が生死輪廻する欲・色・無色の三種の世界）を離れ得ない恩愛」「師の恩は悟りの境地に至らしめる真実の恩」というもので、母の恩は真実の悟りを妨げる煩悩の一つという位置づけだ。母の納得の有無については語られず、証空の帰路の様も、「たちまちに」（平仮名古活字三巻本・二巻本）、「云捨テ、急ギ帰リ来リテ」（第一

種七巻本）であって、その心が母ではなく師・智興にあると読み取れよう。

15　田中徳定「中世唱導資料にみる高僧と母の物語をめぐって」（『駒沢国文』四八号、平成二三年二月）、「中世唱導資料に見る母性」（『国語と国文学』八八―七号、平成二三年七月）。

＊本文の引用は以下の通り。読解の便を図るため、漢字を当て送り仮名を補うなど表記を改めた箇所がある。和歌については、特にことわらない限り、『新編国歌大観』に拠る。

・神宮文庫本・慶安四年板本『発心集』―大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会、平成一二年）

・平仮名古活字三巻本『宝物集』―『宝物集　三巻本』（古典文庫、昭和二八年）

・片仮名古活字三巻本『宝物集』―山田昭全・大場明・森晴彦編『宝物集』（おうふう、平成七年）

・第一種七巻本『宝物集』―大日本仏教全書『撰集抄　発心集　宝物集』（仏書刊行会、昭和五八年）

・第二種七巻本『宝物集』―新日本古典文学大系『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』（岩波書店、平成五年）

・『三井往生伝』―続天台宗全書・史伝２『日本天台僧伝類Ⅰ』（天台宗典編纂所、昭和六三年）

・『元亨釈書』―新訂増補国史大系『日本高僧伝要文抄　元亨釈書』（吉川弘文館、昭和四〇年）

・『雑談抄』―簗瀬一雄編著・碧沖洞叢書七（臨川書店、平成七年）

・『園城寺伝記』―大日本仏教全書『園城寺伝記　寺門伝記補録』（仏書刊行会、昭和五六年）

・『三国伝記』―中世の文学『三国伝記』（三弥井書店、昭和五七年）

・『曽我物語』―日本古典文学大系『曽我物語』（岩波書店、昭和四一年）

＊本稿は、平成二五・二六年度の中世文学演習Ⅰ・Ⅱの授業において、学生とともに神宮文庫本『発心集』を輪読した成果である。ともに学び考えてくれた本学日本語日本文学科の学生たちに心から感謝したい。

（きのした　はなこ／本学准教授）

論理的文章における「問い」の発見
――論理的文章の「始め」「終わり」をどう読むか――

遠藤　摂夫

はじめに

M・J・アドラー、C・V・ドーレン共著の『本を読む本』は、意欲的な読者になるために必要なこととして「読んでいるあいだに質問をすること。その質問には、さらに読書をつづけているあいだに、自分自身で回答するよう努力すること。」を挙げている(注1)。名著の誉れ高いこの本が提唱するこうした読書法は、実は「文章理解」という行為そのものの本質に根ざしている。一橋大学教授石黒圭は文章理解に関わる先行研究を整理する中で、次のように指摘する(注2)。

（Graesserの研究方法選択の背景には）理解主体がテキストに問いかけ、その答えをテキストやそこから得られる推論から得ることによって成り立つ相互作用であるという文章理解観がある。

このモデルは、文章はその文章の書き手の文字言語による一つの「答え」として成立し、読み手はその問いを文章から導き出すことができるとする長田（1995,1998）の文章観、「予測は質問することであり、理解はその質問の一部に答えを得ることである」とするSmith(1971)の読解観、文章についての一貫した表象は、すべての問いの答えが得られた時点で構成されるという内田伸子（1982）の文章理解観、さらには、読解活動は読み手による問題解決活動であり、読解過程における読み手の自問自答のうち「グローバルな問い」が文章理解に重要であるとする舘岡（2001）の読解観、テキストの空所・否定を契機に、読み手とテキストとの相互作用がなされるというドイツの文学研究者イーザー（1982）の受容理論などとも軌を一にしており、

興味深い。

こうした整理をする石黒自身も次のように述べる（注3）。

本書の連接類型の特徴は、幼い子どもが『どうして？』『どうやって？』『何が？』『それで？』『それから？』といった疑問を、物語を読み聞かせている親にするように、理解主体である読み手もまた、そうした疑問を文章に投げかけながら、そしてその疑問にたいする答えを文章そのものから受けとりながら、文章を理解しているという仮説のうえに成り立っている。

石黒は、こうした文章理解観に立ち、それに基づいて文章における「予測の型」を帰納し、独自の文章論を構築した。

本稿は、石黒の研究成果に学び、文章に潜在する「問い」と「答え」の存在を生徒に実感させ、論理的文章との「対話」（注4）の面白さを体感させようとする授業の報告である。

一　論理的文章における「問い」の重要性

一般的に、説明的な文章を分析的に読解することは学習者の学習意欲を減退させがちであるとされている。例えば、三浦和尚は、「説明的文章を説明的文章として読む学習」について、「段落分け、小見出し、要約、要旨といった形式的な指導に陥り、学習者を退屈させる結果となりがち」と指摘する（注5）。

確かに、そういう面があると思われる。しかし、素朴に自分自身の読書経験を振り返るとき、説明的文章、特に論説文には、文学とはまた違った面白さがあるのではないだろうか。この説明的文章特有の面白さについて、石黒はいわゆる説明文、特に中学・高校の国語の教科書に見られるようなものは、典型的な謎解き型の文章であるとして、次のように述べる（注6）。

この謎解き型の文章の特徴は、小さい謎の解明を一つ一つ積み重ねていくことで、その核心にある本質的な謎の解明に迫っていく点にある。その一つ一つの謎を解明していく過程で予測が用いられるわけであるが、そうした予測を繰り返すなかで、読み手は知らず知らずのうちに、書き手が描く謎解きのプロセスにそって理解を進めるようになり、次第に作品世界のなかに引き込まれていくような感覚を覚える。謎解き型の文章は、そんな表現効果を備えている。

石黒の言う予測とは、「当該文を読んで感じられる情報の不全感を後続文脈で解消しようとする理解主体の意識の働き」（注7）と定義されるが、説明的文章でよく用いられる予測は、成分の説明の予測、文の説明の予測、理由の予測といった充足系の予

測である（注8）とされている。この授業で採用した四つの教材文から適宜具体例を挙げれば（傍線引用者）、次のようになる。

●A『世界は謎に満ちている』（手塚治虫）
僕は以前から想像をしていました。
（成分の説明の予測。どんな想像？という疑問を誘発）

●B『ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？』（佐藤克文）
「ペンギン道」を歩いているうちに、だんだん事情がのみ込めてきた。（成分の説明の予測。どんな事情？）

●C『生きることと食べることの意味』（福岡伸一）
ところが不思議なことに、そうやって食べた物がネズミの体の中に入り込んでいったのに、ネズミの体重は一グラムも増えていませんでした。
（理由の予測　なぜ増えなかったのだろう？）

●D『イースター島になぜ森がないのか』（鷲谷いづみ）
ポリネシア人たちは、イースター島にたどり着いた初めての哺乳類だったと言ってもよいのだが、実はそのとき、もう一種類別の哺乳類がひそかに島に上陸していたのである。（成分の説明の予測。どんな哺乳類？）

これらの具体例は、いずれも直後の後続文でその内容や理由が説明される「小さい謎」で、こうした「小さい謎」の解明、すなわち小さな「問い」とその「答え」の繰り返しで文章は進んでいく。こうした「書き手が描く謎解きのプロセス」にそって読者が理解を進めることができれば「作品世界のなかに引き込まれていくような感覚」を味わうことができると石黒は述べているわけである。

ところが、先の「段落分け、小見出し、要約、要旨」といった形式的指導は、いわば「答え」だけを追いかけていく指導で、「問い」の存在は無視もしくは軽視されがちである。これでは「謎解き」の楽しさを味わえない。まず「問い」に着目し、その存在をしっかり認識すること。これが大切である。

二　「問い」の発見の授業

1．「問い」の発見を授業で扱う意義

このように文章理解を「文章あるいはその背後にいる書き手との対話」としてとらえ、「問い」の発見を重要と考えるとして、それを授業で扱うことにはどのような意義があるだろうか。言い換えると、文章理解という半ば自動化された内面活動を授業という場で扱い、分析して顕在化することが、生徒の「読む力」にどのように転化するのかという問題である。

一般に「読む力」は集中した読書体験の繰り返しによってつくとされている。自ら文章へ「問い」かけ、文章そのものから「答え」を受け取りつつ文章理解を進めていく経験の繰り返しによって、文章理解は半ば無意識化、自動化し、自然と文章を「読む力」がつくのであろう。

しかし、現実の高校生を見ると、そうした「自問自答」が適切に自動化している生徒は驚くほど少ない。昨年度の本校一年生の場合、「水の東西」の冒頭文から「鹿おどしの愛嬌ってどういうこと?」(成分の説明の予測)、「なぜ愛嬌ある鹿おどしから『人生のけだるさ』を感じるのだろう?」(理由の予測)という「問い」を発見できた生徒はそれぞれ約七割、八割であった(注9)。しかし、この数字は、この一文を含む一段落のみを与え、十分に時間をとって考えさせた結果であり、決して十分とはいえない。むしろ、そうまでしても三割、二割の生徒は「情報の不全感」を何ら感じることができなかったのである。

こうした現実の改善に取り組む「授業」方法には二つの方向がある。一つは「集中した読書体験」を持ちうる場の設定である。本稿が複数教材を採用した理由の一つはこの点にある。

もう一つの方向が、「問い」の発見について、直接指導するという方向である。文章理解が文章との「対話」あるいは「自問自答」だとして、文章と対話できない、あるいは対話することに意欲的になれないのは、「問い」を発見できないからではないか。この力さえつけば、「答え」を見つけようとする意欲も高まり、「答え」そのものも見つけやすくなる。特に、論理的文章においては、文章にちりばめられた大小さまざまな「問い」の発見こそが文章を読み進める原動力であり、これを系統立てて授業できちんと指導すれば、論理的文章の面白さに生徒は目覚め、読書に対する意欲も、「答え」を見つける能力も高まる。本稿はそうした仮説に立っている(注10)。

2. 「問い」の発見をどう指導するか

では、そうした大小さまざまな「問い」をどのような順序で指導していくべきだろうか。

小さな「問い」の代表例は、語句の意味に関する「問い」である。いわばボトムアップな「問い」で、これはこれで重要である。しかし、こうした小さな「問い」だけでは、その文の周辺の理解にとどまり、全体の文章理解は進まない。より大きな「問い」、いわばトップダウンな「問い」が持ててこそ文章理解は速く、正確になると考えられる(注11)。つまり、まず「大きな」問いを生み出す枠組みから学習し、順次「小さな」問いに移行

していくのが合理的である。

石黒の「予測の型」の場合、「予測」を誘発する「型」は次のようになる。

関係連続の予測…1設定　2終了

連接関係の予測…3成分の説明の予測　4文の説明の予測

5理由の予測　6順接の予測

7逆接の予測　8並立の予測

これから「文章が始まる」と思わせるのが「設定」、そろそろ「文章が終わる」と思わせるのが「終了」である。連接関係の予測は、それぞれ「設定」と「終了」の間で見られる類型であるが、先に述べたように、論理的な文章では3～5の充足系の予測が重要な役割を果たすことが多い。

以上を総合すると、まず「設定」と「終了」について扱い、その中で3～5の充足系の予測を適宜扱うという順序がよい。本稿は、こうした考え方に立って目標や教材を設定した。

三　授業の実際

1．学校の概要と生徒の実態

筆者が勤務する岡山県立西大寺高校は、岡山市東部に位置する、普通科五・商業科二・国際情報科一クラス、一学年三二〇名定員の中規模校である。普通科を中心に毎年五〇人前後が国公立大学に進学している。筆者は勤務六年目で、一年生の担当は二年連続三回目である。国語総合を担当しているが、主たる担当は現代文の週2単位である。

この実践は、二学期の後半と三学期の前半に実施したもので、文学を含めたこれまでの授業で、成分の説明の予測にふれることは何度かあったが、論理的文章の「設定」や「終了」について学習するのは今回が初めてである。

2．教材の選定基準

（1）「設定」について

「設定」は、話題、論点、結論の設定に下位分類される（注12）。本校採用の「国語総合」教科書（注13）の場合、論理的文章の「設定」は、「話題」の設定12編、論点の設定2編、結論の設定1編に下位分類できた。「話題」の設定の後、適宜3～5の充足系の予測を用いて実質的な問題提起を行なうというのが最も多いパターンであった。他社の教科書もほぼ同様であった。直前の文学単元（羅生門）で四人グループによるジグソー学習を行い、好評だったので、今回もそれを継続し、四つの教材を、話

題2、論点1、結論1で、構成することとした。

（2）「終了」について

一方、「終了」[注14]であるが、論理的文章の場合、「先行文脈のまとめ」と「表現主体の最終判断」に下位分類される。

しかし、「終了」については、石黒自身の次の指摘も考慮に入れなければならない（傍線引用者）[注15]。

この「終了」に見られる終わり方は、終わりらしい終わり方といえる。現実の文章ではこの、いかにも終わりらしい終わり方を避けることが多い。読み手が「終了」を予測しないときに、あえて段や文章そのものを閉じ、関係連続の予測を余韻として残し、ある種の効果をねらうことも少なくない。

では、「現実の文章」の「終わり方」はどのように下位分類できるのか。石黒の別の著書（『よくわかる文章表現の技術Ⅱ』[注16]）では、要旨型、表明型、心理型、間接型、省略型、付加型の六類型が示されている。要旨型、表明型は、先の「終わりらしい終わり方」に該当し、予測の型の「先行文脈のまとめ」と「表現主体の最終判断」にほぼ重なると考えられる。残りの四類型が「終わりらしい終わり方を避け」たものの類型ということになる。以上を総合すると、四つの教材の「終わり」の条件としては、「要旨型」と「表明型」を必ず含み、できればそれ以外の四類型を一つは含むくらいが適当であると考えた。

（3）充足系の予測について

「設定」と「終了」の次は、充足系の予測であるが、これについてはあまり厳密に規定せず、文章の「始め」の部分に含まれることが多い、「大きな問い」が比較的わかりやすい充足系の予測で構成されているか、また、本論部分に適度に充足系の予測が含まれているかの2点をチェックする程度にとどめた。条件が多すぎると教材編成が困難になるからである。

（4）教材の内容や難易度について

内容については、一学期に学習した採用教科書所収の『新しい地図を描け』が「地図」を題材にした内容だったので、この二学期後半は、科学的な内容で、生徒にとって新しい発見や認識の拡充をもたらす内容を含むものを教材としたいと考えた。また、難易度については、前単元（羅生門）で原典との比べ読みを体験済みとはいえ、今回の教材数は四つなので、なるべく読みやすい文章を選択することとした。

3．実際に選んだ教材

教材の選定については、採用教科書の難易度が若干高いと判

断されたので、他社の国語総合の教科書から全て選んだ。文章の「始め」について、文章の冒頭二頁だけを示し、後続文を伏せて「大きな問い」を考えさせる作業を実施するのに、他社の教科書の方が都合がよい（注17）という事情もあった。実際に選んだのは、先にも示した次の四つである（注18）。

A『世界は謎に満ちている』（手塚治虫）

B『ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？』（佐藤克文）

C『生きることと食べることの意味』（福岡伸一）

D『イースター島になぜ森がないのか』（鷲谷いづみ）

A～Dの「設定」と「終わり」の型は次のようになっている。

A　結論の設定　→要旨型

B　話題の設定（成分の説明の予測）→付加型

C　論点の設定　→要旨型

D　話題の設定（成分の説明の予測）→表明型

解説をAB、CDの組み合わせで行なうので、同じ型が続かないようにする、「好奇心」の重要性を説くAは単元の始めにおく、中学校教材（「モアイは語る」）と類似しているDは集中が切れやすい最後におく、といった理由でこの順とした。

以下、個々の教材について具体的に述べて、「設定」や「終わり」の型の説明に代える。

（1）文章A～Dの「設定」について

①A『世界は謎に満ちている』の「設定」

冒頭文で「謎や神秘が次々と解明され」と、「謎や神秘」について話題設定した後に、「一つの謎が解かれれば、その十倍の新しい謎がそこから発生する、というのが僕の持論です。」と自分の立場を鮮明にし、「その謎に好奇心を持って、さまざまな仮説を立てることは、なんとも楽しいことではありますまいか。」と主張した後に、ナスカの地上絵に話題を転じていく文章。「結論」の設定型といってよい（注19）。

②B『ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？』の設定

「ペンギンが列を作ること」から語りだして「自分が実際に氷原を長距離歩くはめになったとき、何となく彼らの気持ちがわかってきた。」（傍線引用者）と冒頭二段落は展開する。直後の第3段落は子育て期のペンギンの生態についての説明に転じるので、ますます「彼らの気持ちってどういう気持ち」という疑問は読者の中で膨らんでくる。この文章は、話題の設定＋成分の説明の予測による実質的な問題提起という型である。

③C『生きることと食べることの意味』の設定

「食べること」から語りだし「食べることの意味を問うためには生きていることの意味を探る必要があります。」と述べて

第1段落は閉じられ、第2段落冒頭で「生きているとはどういうことか、生命とは何か」と問題提起文によって論点が設定されている。第3段落はファミリーレストランのメニューの話題に転換されており、典型的な論点の設定型である。

④D『イースター島になぜ森がないのか』の設定

イースター島について語りだした後「その『イースター島の教訓』は、生態系に対する無配慮が生んだ前工業化時代の自然破壊の例として、今では多くの環境学や生態学の教科書に紹介されるポピュラーな話題の一つとなっている。」と述べて、第1段落が閉じられる。「イースター島の教訓」という話題が設定され、それについて一応「生態系に対する無配慮が生んだ前工業化時代の自然破壊の例」と説明があるのだが、特に「生態系に対する無配慮」の部分が具体性に乏しいために、読者は「どんな無配慮?」という疑問を誘発される。話題の設定＋成分の説明の予測による実質的な問題提起という型である。

（2）文章A～Dの「終わり方」について

①A『世界は謎に満ちている』の終わり方

第17段落は「このように」で始まり、第18段落は「そしてそれは好奇心があってこそやれることなのです。」と文章冒頭部にも出てきた「好奇心」について強調し「のです」でまとめて文章を閉じている。「このように」も「のだ」「のである」も「終了」を予告する形態的指標で、この文章は内容・形式ともに典型的な要旨型（「結論をまとめて示す型」（注20））である。

②B『ペンギンはなぜ一列になって歩くのか?』の終わり方

第10段落は「彼らは過酷な環境でぎりぎりの生活を続けた結果として、そのような習性を身につけたのである。」という一文で閉じられ、題名によって示される「なぜペンギンは一列になって歩くのか」という問いの答えを示して終わっている。

ところが、文章はまだ続く。第11段落は、「ところで」で始まり、最初に「ペンギン道」を見つけたのはどんなペンギンかという話題を提示する。そして、「しかし、勇気を出して最初の一歩を踏み出した一羽が開拓した新たなペンギン道は、後に続く者たちに安心感と多くの餌をもたらしたのである。」という一文で文章は完結する。

「安心感」や「餌」は文章の「始め」や「本論」の内容の繰り返しであるから、この文章の「終わり」には「要旨型」の要素も当然あるが、授業では「ところで」の話題転換と「最初の一歩を踏み出した一羽」という新しい要素を付け加えた点を重視して、「付加型」として紹介した。

③C『生きることと食べることの意味』の終わり方

題名が示す大きな問い「生きることと食べることの意味」については、「このように」で始まる第14段落でまとめられ、「生きるとはその絶え間のない回転そのものなのです。」「そして、その回転を持続するために、私たちは食べ続けなければいけないわけです。」と「答え」が示されて段落が終了している。しかし、文章はこれで終わらず、一行あけてさらに三段落続く。

第15段落は「方丈記」の引用で始まり、続けて16段落は「食い」「食われる」ことは、分子の流れをつなげていく生命の営みであることにふれ、そして最後17段落はあらゆる生命系や環境全体が「動的な平衡状態」にあるという事実は、「これからの生きることや食べることを考えていくうえで、非常に重要なキーワードになると私は考えています。」という一文で閉じられる。これら三段落は、今まで述べたことを繰り返しつつ、より一般化し、「動的平衡」というキーワードを示して終わっている。要旨型のうちの（結論を一般化する型）と解釈した。

④D『イースター島になぜ森がないのか』の終わり方

題名に示された「イースター島になぜ森がないのか」という問いは、第10段落で「ヒトによる直接の森林破壊」と「ラットがもたらした生態系への影響」によって「ヤシ類の森林は」「ほぼ完璧に破壊されてしまったのである。」と「答え」がまとめて示されている。

また、第1段落の「イースター島の教訓」とは具体的にはどのようなものかという問いに対する答えは、「イースター島の教訓とは」で始まる第12段落でまとめて示されている。

しかし、文章はここで終わらない。第13段落で「祖先を崇める」ための巨石群に話題を転じた筆者は、第14段落で「今後の人類の存続は、祖先よりもむしろ子孫を慮る文化、すなわち持続可能性という倫理を支える文化を早急に築くことができるかどうかにかかっているとも言える」と述べて文章を閉じている。「とも言える」とゆるめた言い方ではあるが、「イースター島の教訓」に学び、「持続可能性という倫理を支える文化を早急に築く」べきであるという主張で終わっている文章であると分析できる。「表明型」と解釈した。

4．授業の展開と発問

授業の展開は次のようであった（1コマ45分。全13時間）。

第一次　文章の「始め」をどう読むか（4）

1　てびき（注21）を参考に「始まり」について考える（1）

2　四人グループで考える（ジグソーⅡ形式（注22））（1）

3　考察結果を黒板に板書し、解説を聞く（2）

第二次　文章の「本論」をどう読むか（4）
1～3　第一次と同様
第三次　文章の「終わり」をどう読むか（4）
1～3　第一次・第二次と同様
第四次　A～Dから一つ選び、てびきを参考に、全文通しての「まとめ」を作成する（1＋家庭課題[注23]）

それぞれの次の1で、生徒は本文を黙読する。与えた本文は、第一次は最初の二頁のみ、第二次は全文、第三次は最後の二頁で、あらかじめ段落番号を入れて印刷しておいた。

各次の発問はA～D全て共通で、次のようなものであった。

第一次　文章の「始め」をどう読むか
1トピックワードは何ですか
2てびきを参考に、話題・論点・結論の設定のどれに当たるか考えよ。また、その根拠を具体的に挙げよ。
3大きく二つに分け、その根拠を具体的に挙げよ。
4題名と「始め」から生じた大きな問いをまとめよ。

第二次　文章の「本論」をどう読むか
1「始め」で挙げた大きな「問い」の「答え」はどこか。
2読者を引きつける新しい「問い」を一つ見つけよ
3「終わり」が始まるのはどこからか。また、その根拠。
4てびきを参考に、本論の述べ方の特徴を指摘せよ。

第三次　文章の「終わり」をどう読むか
1○○段落から「終わり」と考えたのはなぜか[注24]。
2てびき[注25]を参考に、この「終わり」は6類型のどれに該当するか考えよ。また、根拠を具体的に挙げよ。
3　この文章の「終わり」を読んだ感想

5．生徒の反応とそれへの対応

個人レベルでは「問い」や「答え」を見つけることができない生徒も、四人グループで話し合い、ジグソーを経て他のグループとの情報交換を済ます頃には、自分なりの「問い」「答え」を一応持つようになる。そして、それは教師の事前の教材研究とほぼ一致するものとなったが、中には予想しない反応もあった。解説時には、それらの問題に瞬時に対応することが求められる。主な反応としてはそれぞれ次のようなものがあった。

①Aの第5段落を前につけるか、後ろにつけるかの対立

二分せよ、という発問に関わって生じた対立。「僕の持論」という表現を根拠に「結論の設定」と判断したのはいいが、第5段落の「楽しいことではありますまいか」をどう扱ってよいか、判断できなかったためと思われる。多数意見は、第6段落

からナスカの地上絵の話に話題が転換されるということを根拠に、第1～第5段落を一まとまりと判断していた。話題の転換に敏感になること、「～ではありますまいか」はやや古い言い方で、「～ではないでしょうか」と同じ意味。疑問の形をとりつつ、実際には主張をしている文末であることを指摘して、多数意見を是とした。

②Bの第11段落で要旨型が多数を占めたクラスの出現

事前の教材研究の時点で、両方の要素を認めていたわけで、多くのクラスで「要旨型」と「付加型」が対立し、議論が白熱した。しかし、中には8対2くらいの割合で、「要旨型」が多数を占めたクラスがあった。てびきの「要旨型」に、「のである」という文末が例示してあることからの即断が原因であると思われた。「のである」はまとめの文末であるが、この段落は「ところで」で始まっており、内容的にも「最初のペンギン」という新しい要素が付け加えられており、むしろ「付加型」と解釈したいと解説した。

③Cの第5段落から問題提起を発見した少数意見

第2段落の「生きているとはどういうことか、生命とは何か」によって論点が表示されており、直後の第3段落で話題がファミレスに転換しているので、ここで二分されるというのが事前の用意。ところが、第5段落の食べ物を単にカロリー源としてだけ見ると、「生命現象の非常に大切な側面を見失ってしまうことになります」という一文の傍線部分は「成分の説明の予測」だから、ここまでを一まとまりとするという主張が展開された。大変力量のある生徒の主張なので、賛同者も少なからず出たが、第3段落から「食べること」に話題が移っていること、今発見した「問い」は、第二次でやる予定で、「できすぎ」で困ると解説をした。授業は笑いのうちに終了した。

④Dの「終わり方」を「表明型」と判断できない

要旨型の細分化の一つに「結論をゆるめて示す」があったためか、多くのクラスで「要旨型」（結論をゆるめて示す）が多数意見を占めた。表明型が多数を占めたのは2クラスのみで、少数意見としても登場しなかったクラスも2クラスあった。てびきの「表現」にとらわれ、内容の検討を怠ってしまっている。

「まとめる」というのは、今まで既に述べたことをもう一度繰り返し、「まとめる」ということで、この文章の場合、持続可能性云々という内容はここで初めて出てきた内容であり、「まとめ」ではなく、中学校の作文等で習った「事実」と「意見」に近い形、すなわち「イースター島の教訓」という事実に学び、「持続可能性という倫理を支える文化」を早急に築くべ

きであるという主張を最後に示す表明型であると解説した。

6．成果と課題

何よりの成果としては、全体として楽しく学習できたことである。「始め」の単元では、自分で「問い」を発見できた達成感や伏せられた後続文への期待が多数ふりかえり欄に記入されていたし、「終わり」の単元でも、てびきを片手に真剣に議論する姿があちこちで見られた。すべてが要旨型となってしまい、「先生が四つとも同じ型を持ってくるはずがない」といったクイズまがいの会話もあちこちのクラスで聞かれた。文章の「始め」や「終わり」の「型」の分析といった重苦しくなりがちな作業も本文の与え方やてびき等を工夫すれば楽しく授業できることがわかったのは収穫である。

もう一つの成果は、反応の項で一部記したように、自分でどんどん「成分の説明の予測」や「理由の予測」を発見する生徒が現れたことである。これら連接関係の予測については、これまでの授業で、発生原理を解説することはほとんどなく、「問い」の発見に際して、そうした現象が指摘できるときに簡単に名称と働きを解説するに留めてきた。こうした「帰納」的な扱いの方が効果的であると考えたからだが、そうした不十分な扱いでも力量のある生徒は何回か繰り返せば発見できるようになった。第二次の発問２（新しい問いの発見）は、こうした生徒の活躍によってスムーズに話し合い活動が展開した。

一方、課題としては、成果の裏返しで、「問い」の発見能力にはかなりの個人差が見られることが挙げられる。力量ある生徒がどんどん「問い」を発見していく横で全く発見することができない生徒もいる。最後の「まとめ」のプリントにはそうした力量差が顕著に現れており、授業で扱った部分以外はあまり分析できず、ひたすら語句調べで余白を埋めている生徒も少なからずいた。語句のようなローカルな「問い」しか見つけられない生徒をどのように導き、グローバルな「問い」を持たせていくか。二年次以降「連接関係の予測」を扱っていく予定であるが、こうした個人差への対応は大きな課題である。

また、内容面について、最後にふりかえり欄を設ける以上のことをこの単元ではしなかった。しかし、Ａのナスカの地上絵について「宇宙人説」に立つかどうか、Ｂの「最初のペンギン」はこのクラスで言えば、どんな人がなるのがよいか、Ｃ「しょうが焼き弁当」を三年間毎食食べ続けた人の体は、豚肉由来の分子のみで構成されるか、Ｄの「ラット」は中学のときに読んだ「モアイは語る」にはなかった内容で驚いたといった話題は、

授業中に脱線として授業者が言及したこともあって、休み時間や振り返り欄のあちこちで生徒たちも話題にしていた。内容面における認識の拡充についても、今後さらに追究したい（注26）。

おわりに

「まとめ」に記された生徒の感想をそれぞれ一つ紹介する。

A＊一つ一つ細かく分析することによって文に隠されている筆者の書き方の工夫などが見つけられて、筆者が伝えたかったことがいっそうわかった気がした。世界は謎でいっぱいなんだと改めて思った。

B＊過酷な状況や環境であってももがきながら少しずつ歩き続ける勇気さえあれば自然と道ができ幸せが訪れるというメッセージが込められている気がした。

C＊文章の内容を書いていると、急に何これ？と思う文もあるけど、読んでいるうちにあーこれを説明するための前置きかと納得できる。そういう部分で工夫して読者をあきさせないようにしているのかなと思った。

D＊ラットの話題を④段落で示してから、ずっといつ戻るのだろうと探していたら、⑨段落でやっと戻って、上手いなあと思った。「子孫の幸せ」「祖先を敬う」といったキーワードも⑥段落から⑬⑭段落にとんできていたのは気づいていなかったので、ゆっくり読むことは大事だと思った。⑭段落で提示された「持続可能性」というキーワードも⑬段落を読み返すと納得できた。

これらの感想を読むと、生徒は「まとめ」を作成する過程で、じっくりと本文を読み返し、筆者の工夫を味わいながら文章理解を深めている様子が観察できる。論理的文章との「対話」はやはり楽しいのである。

注1　M・J・アドラー、C・V・ドーレン著（外山滋比古、槇未知子訳）『本を読む本』（ブリタニカ出版　一九七八）38頁

2　石黒圭『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』（ひつじ書房　二〇〇八年）51・52頁

なお、この引用で省略された文献名等の詳細は次の通りである。

Graesser,A.C.（1981）.prose comprehension beyond the word

New York Springer-Verlag

長田久男（1995）『国語文章論』和泉書院
長田久男（1998）『文章を読む行為の研究』渓水社
Smith,F（1971）Understanding Reading
New York Holt,Rinehart&Winston
内田伸子（1982）「文章理解と知識」
佐伯編『認知心理学講座3　推論と理解』東京大学出版会
舘岡洋子（2001）「読解過程における自問自答と問題解決方略」
『日本語教育』111
イーザー・ヴォルフガング（1982）『行為としての読書―美的作用の理論』岩波書店

3　石黒圭　前掲書79頁

4　石黒圭　前掲書79頁は、（本書の連接類型は）「理解主体である読み手が、文章と、そしてその背後にいる書き手と対話をしながら理解行為を進めた結果、帰納されたものなのである」としている。

5　三浦和尚『読むことの再構築』（三省堂　二〇〇二年）九八頁

6　石黒圭　前掲書347頁

7　石黒圭　前掲書63頁

8　石黒圭　前掲書347頁

9　拙稿「テキストとの対話を大切にした『水の東西』の授業」岡山大学『国語研究』第27号（平成二十五年三月）

10　時間的に前後するが、「一年間の授業の感想」として、「私は本を読むのがあまり好きではなく、国語も得意ではありませんでした。しかし、先生の授業で細かく文章を読む練習をするうちに、文章を読むことはとても楽しいことなんだと知ることができました。まだまだ問いの発見は得意ではありませんが、来年もよろしくお願いします。」という感想があった。

11　外国人の日本語学習についてであるが、舘岡洋子氏が発話プロトコル法を用いて外国人学習者の文章理解の様子を調査している。その結果「読解力の高い読み手はよりグローバルに情報処理をしようとしているのに対し、読解力の低い読み手は部分的な処理に留まっている可能性がある」（前掲注2論文70頁）と分析しているが、こうした示唆は国語教育にも有用である。

12　石黒圭　前掲書第7章参照

13　第一学習社　『高等学校　新訂国語総合　現代文編』

14　石黒圭　前掲書第８章参照

15　石黒圭　前掲書117頁

16　石黒圭『よくわかる文章表現の技術Ⅱ』（新版）（2009年明治書院）29頁～59頁参照

17　後続文を与えてしまうと、後続文を読むことで手一杯になってしまい、「問い」をつかむことがおろそかになる恐れがあるため。少なくとも初心のうちは、ある程度のところで文章の進みを止め、自分の内心に問いかけながら「問い」を探すようにするのが適当と考えた。

18　文章ＡとＤは、『高等学校　標準国語総合』（第一学習社）所収で、それぞれ写真等を含めて六頁、八頁の分量。文章ＣとＤは、『新編　国語総合』（大修館書店）所収で、いずれも写真等を含めて六頁の分量であった。

19　文章の最後まで読まずに「結論」とすることに違和感を覚える向きもあると考えられるが、文章の線条性に忠実に考えれば、読み手は読みながら文章を「理解」していくのであり、「結論」と仮定して読み進め、最後まで読んで修正の必要を感じれば、修正すればよい。生徒にもそのように説明して、授業を進めた。石黒圭氏の「説明文読解の方法―たどり読みによる文章構造の把握―」『一橋大学留学生センター紀要』５に同様な発想に立つ記述がある。

20　石黒圭　注16の前掲書53頁

　要旨型は「結論をまとめて示す」「結論をゆるめて示す」「結論に疑問を投げかける」「結論を一般化する」の四つに細分されている。

21　第一次、第二次は、理論そのものを紹介するという形はとらず、小学校教材（「たんぽぽのちえ」「ありの行列」「生き物は円柱形」）を例文として分析し、設定の仕方や終わり方、本論の特徴（具体例の列挙、研究の引用、譲歩）などを具体的に示すという方法をとった。第三次の「終わり方」については、石黒氏の著書（よくわかる文章表現の技術Ⅱ）から例文等を引用した。第四次については、文章Ｃの「重ね読み」をねらって出題した実力考査の本文（福岡伸一「生物多様性とは何か」（東京書籍『国語総合（現代文編）』））をてびきとして使用し、段落ごとの内容を簡単に小見出しにする、指示語や接続語の分析をする、文章の設定、終了、連接関係の予測等の述べ方を示す、重要語句の意味調べをするといった各種作業を欄外に記したプリントを配布した。参考資料として第三次のてびきの一部を載せておく。

22　座席を中心とした四人班で検討→担当者をそれぞれ決めて、四つの課題ごとに各班のメンバー10人で協議→協議の成果を四人班に持ち帰り、再び検討→黒板に成果を発表→クラス全体で検討・授業者の解説といった流れである。香山真一氏（現岡山県立和気閑谷高等学校校長）のジグソーⅡ操山モデルを参考にしている。

23　注21で述べたように、段落ごとの内容・述べ方の分析・語句調べなどを一つの文章全体にわたってする作業であるから到底一時間では終わらない。高校入試の実施に伴う家庭学習期間中の宿題とした。

24　第二次の問3とほぼ同じ問いである。第二次と第三次の間には冬休みがあり、記憶喚起のためにほぼ同じ問いを繰り返した。二学期末にもう少し時間をとることが可能なら、第二次と第三次を融合することもできたかもしれない。

25　本文で述べたように、試行として石黒氏の著書の融合を図り、生徒に示してみたもの。形態的指標の示し方を含め、まだまだ検討が必要である。しかし、「終わり方」として、要旨型と表明型が中心的存在であること、付加型・間接型といった典型的な形ではない終わり方もあることという認識はぜひ生徒に持たせたい。今後の研究課題の一つである。

26　第四次で示した「重ね読み」による内容面の深化・拡充を考えている。一年次で、文章の「始め」「終わり」と成分の説明の予測、二年次で文の説明の予測と理由の予測を中心に扱い、三年次では、複数教材を組織する観点を内容的なもの（例えば、「持続可能性という倫理」）とするといった形でバランスをとった指導を心がけたい。

（えんどう　せつお／岡山県立西大寺高等学校教諭）

（参考資料）

国語の泉

第27号

（平成26年1月08日発行）

文章の「終わり」をどう読むか―細分化された「終了」の型の6類型

石黒圭氏は、『文章表現の技術Ⅱ』（明治書院）の中で、文章の終わり方について、さらに分類を試みています。26冊で示した基本型と前半部分はほぼ重なりますが、その6分類を分類すると、次のようになります。

A命令型…終わりを命令的に書く

◆強理型…1、要旨型…終わりを総括として書く

2、表現型…終わりを主張として書く

◆心理型　3、心理型…終わりを心理的に書く

B強理型　4、強理型…終わりを理論的に書く

C省略型　5、省略型…終わりを書かない

D付加型　6、付加型…終わりに付け加えて書く

26冊で紹介した基本型は「こうだ！まとめのだな、この文章終わるんだな」という予測を読者に提示する型ですから、当然直線型になります。そして、論理的文章ですから論理型（つまり、26冊で紹介した基本型（1、要旨型のまとめ　2、筆者の意見判断）は、1、要旨型　2、表現型　に対応すると考えられます。3、心理型から6、付加型は、「文章表現の技術Ⅱ」（明治書院）に挙げられている例を参考として、この6類型を細分化すると、次のようになります。

1、要旨型…終わりを総括として書く

①結論をまとめて示す

のだ・のである、わけだ・わけである　など

したがって、以上・以上のように、このように・このようにして・こうして　など

②結論をぼかして示す

思う・思われる、考える・考えられる、感じる・感じられる　など

だろう・ようだ、みたいだ、らしい、そうだ、かもしれない、にちがいない、はずだ　等

③結論を疑問形で示す

（も）ではないか、（も）ではないだろうか、（も）ではなからうか　等

④結論を「一般化する　※「表現の技巧」より　『生徒物語田村形』も参照せよ

※「個に入りては個に従え」という師の言葉は、―新たな情報を引き入れる」ことで、より高い次元での結合を目指すことであると思う。

2、表現型…終わりを主張として書く

①終わりを実現希望の形で書く

～たい、～う・よう、～ましい、～つもりだ、～てほしい、～そもらいたい　など

②終わりを実現要求の形で書く

～べき、～ほうがいい、～ばいい、～ともよい、～してはならない、～なければならない、～必要がある、～する必要はない　など

3、心理型…終わりを心理的に書く

①結論を感覚的に示す　※「表現の技巧」より

※うん、これって上手く自分を表している気がするぞ。

②結論を感情的に示す　※「表現の技巧」より

※そう論理的なものではない……全ては気分的な問題…（もう！ね、反復した後）

ああ、何と表だ！

③背後にある筆者の事情を示す　※「表現の技巧」より

※このレポートを書きながら自分を遠慮なくぶちまけていいなあと思いました。

4、強理型…終わりを強理的に書く

①結論を強調して示す　※「表現の技巧」より

※「らしい」というスクリーンが取り払われたネットとは、意味よりものびのびと表の自分をさらしている私がいました。

②結論を最後に示す　※「表現の技巧」より

※いつか夢を語め、夜中に起き出けて小説を書き続けるという生活をゆめてしまうかもしれない。（中略）けれど、きっと忘れない、夜明後の晩能だった。

5、省略型…終わりを書かない

①結論がないことをしめす　※「表現の技巧」より

※だが、これにすらと上手く表れない私の書く文章は迷走を続けている。

6、付加型…終わりに付け加えて書く

①結論にさらに別の内容を付け加える　※「表現の技巧」より

※ちなみに今、私を「ロスキャラの来っ子でおねえっぱな○歳」であると表現されない人はまずいない。

実際の文章にあたってみよう

要旨型・表現型・心理型・強理型・省略型・付加型、実際の文章はどうなっているだろうか、とりあえず、Ⅱ学期に学習したA～Dの文章について分析してみよう。

未発表資料　坪田譲治・原民喜書簡
――翻刻と解題――

山根知子
竹原陽子

はじめに

坪田譲治（一八九〇（明治二三）年―一九八二（昭和五七）年）と原民喜（一九〇五（明治三八）年―一九五一（昭和二六）年）との交流については、これまで発表された両者の随筆等にも年譜類にも触れられておらず、知られていない関係であった。ところが、両者の書簡についての調査によりお互いの書簡が見出されることで二人の出会いを跡づけることができ、その内容を考察することで、その文学および人生における関係の重要性を指摘することができることがわかった。

今回は、そうした現在確認されている書簡について、吉備路文学館と広島市立中央図書館の二館が所蔵している書簡を翻刻し解題を付すこととする。発見された書簡の点数は、吉備路文学館に坪田譲治あて原民喜書簡が一四点（H1～H14）、広島市立中央図書館に原民喜あて坪田譲治書簡が一点（T1）である。今後も、これらに続いての書簡および資料の発見が期待される。

翻刻

凡例

・旧漢字は、固有名詞を除いて、新漢字に改めた。
・旧仮名遣いについてはそのままとした。
・書き間違いについては、そのままとし、ママ表記を付した。なお、民喜の日付けについての書き癖である「～・」は、「～日」に改めた。
・句読点、空白については、書かれた通りとした。

・判読し難い文字を推定によって示した場合には〔　〕内に記し、判読不能な文字は〔?〕とし、推測できる情報がある場合はその旨を付した。
・注記は、坪田譲治に関することについては山根知子が担当し、原民喜に関することについては竹原陽子が担当した。

【坪田譲治あて原民喜書簡】（吉備路文学館蔵）

書簡H1　一九三六（昭和一一）年三月一四日

［葉書］日本郵便一銭五厘葉書

［筆記具］墨

［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷六丁目八六六
坪田譲治様

千葉市寒川羽根子一六六七
原　民喜

三月十四日

［消印］千葉／11．3．14／后4―8（注1）

［葉書裏面］
拝啓
先日は突然御伺ひして失礼致しました　どう云ふものか後で大変嬉しくなりました　何卒今後はよろしく御教導下さい　敬具

注1　原民喜は、一九三二（昭和七）年に慶應義塾大学文学部英吉利文学科を卒業。一九三四（昭和九）年に千葉市寒川羽根子へ転居し、一九三五（昭和一〇）年三月に掌篇集『焔』を自費出版した。同年一二月に短編小説「蝦獲り」を雑誌『メッカ』に発表して、雑誌へ寄稿をはじめた頃である。このとき、民喜は三〇歳、坪田譲治は四六歳。

書簡H2　〔一九三六（昭和一一）年〕一二月二九日

［封書］切手は剥がれ欠落

［筆記具］黒インク

［封筒表面］東京市豊島区雑司ヶ谷
六丁目八六六
坪田譲治様

［封筒裏面］千葉市登戸ニノ一〇七
原　民喜

十二月二十九日

［消印］12．30／后〔？〕―4

［便箋］

拝啓

お寒くありますがお変りありませんか　さて先日載いた随筆[注1]集、はじめ半分を一気に読み途中で惜しくなり少しづつ読んで居ましたため　御礼申上げるのが遅れました　どれもみな面白くお宅の書斎でお話を伺つて居るのと同じやうな気持が致しました　しかし回想として、淋しさ、生死の問題、明治のセンチメンタリズム、はにかみ等が今日一般では既に縁遠いものとしてとりあげられてゐるのを読み私ももう今日とは多少縁遠い存在かと思つてみたりしました　今年もあと二日残すところとなりました　それではよきお年をお迎へ下さい

草々

原　民喜

坪田譲治様

注1　ここで「随筆集」とあるのは、書簡の文面から、譲治が初めて一九三六（昭和一一）年一〇月に発行した随筆集『班馬鳴く』（主張社）であることが明らかとなることから、この書簡の消印の「年」の部分が消えており不明であったが、一九三六（昭和一一）年であると推測することができる。この書簡文面において、その根拠となるのは、「回想として、淋しさ、生死の問題、明治のセンチメンタリズム、はにかみ等が今日一般では既に縁遠いものとしてとりあげられてゐる」という言葉である。譲治の随筆集『班馬鳴く』に所収された随筆には、「もの淋しい風景」としての夢の回想である随筆「夢に釣る魚」や「生死に迷うというような気持を覚えた」という回想をした随筆「壁に書く」をはじめ、随筆「明治回顧」では「明治も終った。大正も終った。人々は二つの時代に対して、今、回顧的になっている」とあり、随筆「はにかむ心」では「私は幼年の頃とてもはずかしがりの子供であった」という子ども時代の自己の心理と、当時の児童の読物に出てくる児童にはそうした「素朴さを失っている」という問題意識が描かれている。

書簡Ｈ３　一九三七（昭和一二）年一月二九日

［葉書］日本郵便一銭五厘葉書
［筆記具］墨
［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷六丁目八六六
坪田譲治様
千葉市登戸町二丁目一〇七
原　民喜
［消印］千葉／12．1．29／前8―12
［葉書裏面］
拝啓
其后は御無沙汰致して居ります　別便で送りました原稿は一年前の旧作[注1]ですが　お暇の折　一度目をとほして下されば幸です
一月二十八日

注1　「一年前の旧作」が何の原稿か、不明である。この葉書の約一年前の民喜の発表作としては、一九三五（昭和一〇）年一二月に雑誌『メッカ』に発表された小説「蝦獲り」があるが、『メッカ』は一九三五年から一九三六年にかけて、民喜と譲治の両者が度々執筆した雑誌であることから、民喜が譲治に『メッカ』を送付したとは考え難い。そのため、「一年前の旧作」とは、一年前に執筆し、未発表の原稿と推測される。

書簡H4　一九三七（昭和一二）年二月一三日　速達
［葉書］日本郵便一銭五厘葉書
［筆記具］墨
［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷　六丁目八六六
坪田譲治様
速達
千葉市登戸町二の一〇七
原　民喜
［消印］千葉新町／12．2．13／〔后0―〕4
［速達印］〔小石川？〕12．2．13／后4―8
［葉書裏面］
拝復
御葉書[注1]二度有難く拝読致しました　大変忝く嬉しく存じます

明日お昼頃御邪魔に参上致したいと思ひます　いづれ御拝眉の上　万々（ママ）

二月十三日

注1　譲治が二度、民喜に送った「葉書」とは、書簡H3でいう「別便で送った一年前の旧作」に対する返信と推測される。

書簡H5　一九三七（昭和一二）年二月一七日

［葉書］日本郵便一銭五厘葉書

［筆記具］墨

［葉書表面］東京市豊島区雑司ヶ谷
六丁目　八六六
坪田譲治様

千葉市登戸町二の一〇七
原　民喜

［消印］千葉／12．2．17／后4―8

［葉書裏面］

拝啓

先日（注1）は御多忙のところを態々私のために御配慮下さいまして誠に恐縮して居ります　しかし私にとつては大変印象に残る有意義な一日だったと喜んで居ります　遅れながら御礼申上げます

草々

二月十七日

注1　書簡H4より、民喜は二月一四日のお昼頃、譲治を訪ねたと考えられ、この葉書はその訪問に対する礼状である。民喜は譲治に面会し、先に送っていた原稿に対するアドバイスを受けたものと考えられる。

書簡H6　一九三七（昭和一二）年四月一〇日

［葉書］日本郵便一銭五厘葉書、五厘切手貼付

［筆記具］墨

［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷六丁目八六六
坪田譲治様

千葉市登戸町
二丁目一〇七
原　民喜

［消印］千葉／12．4．10／后0―4
［葉書裏面］
拝啓
暫く御無沙汰致して居りますが御変り御座いませんか
今日別便で近作(注1)を送つておきましたが御暇の折御一読下さい
この月の廿日過ぎにちよつと上京致しますからその頃又御邪魔致したいと存じます
草々
四月十日

注1　一九三七（昭和一二）年の民喜の発表作は、五月の短編小説「幻灯」、一一月の短編小説「鳳仙花」の二作のみ（いずれも雑誌『三田文学』に発表）であることから、近作とは、「幻灯」と推測される。
民喜は同年二月に譲治を訪問した際と同様に、このときも事前に作品を送付した後、譲治を訪問しており、譲治から直接作品に対する指導を受けていた様子が窺われる。

書簡H7　一九三七（昭和一二）年五月三〇日
［葉書］日本郵便一銭五厘葉書、五厘切手貼付
［筆記具］墨
［葉書表面］東京市豊島区雑司ヶ谷
六の八六六
坪田譲治様

千葉市登戸二の一〇七
原　民喜

［消印］千葉／12．5．30／后8―12
［葉書裏面］
拝復
先達は御取混中のところを大変失礼致しました　早速こちらから御手紙差出すべきところを今日は態々御手紙を戴き恐縮致しました
「日本ローマン派」(注1)に加へて戴けるのは結構と存じますが更に詳しく先方(注2)の御意向も伺つてみたいと思ひます　いづれ来月中

頃か下旬頃御相談にあがりたいと思いますのでその折には又宜敷く御願ひします
早速御伺ひしたいのですが今仕事にひつかかつて居ります
愚妻[注3]が宜敷申添へ居ります

草々

五月廿日

注1　民喜は一九三八（昭和一三）年一月に短編小説「不思議」を雑誌『日本浪曼派』に発表した。『日本浪曼派』への寄稿は、譲治の推薦により実現したものと考えられる。

2　「先方」とは、書簡H8に「伊藤氏を訪れ今度の雑誌の了解を得ておきました」とあることから、伊藤整のことと考えられる。

3　戦前、譲治の紹介で民喜の訪問を受けた（「原民喜君を推す」『三田文学』一九四九（昭和二四）年一月）という佐藤春夫は、民喜との初対面の思い出について「彼は彼女を誘って来たのではなく、むしろ彼女に伴はれて、それも小学生が母につれられて学校の先生の前に叱られに出たかのやうに見えた」「彼はこちらの言葉に対して無言でうなづいたり頭をさげて見せたりしたが、自分の言葉は直接には云へないかのやうに低く口のなかの呟きを細君に囁いて一々取次させるのであつた」（「原民喜詩集叙文」『原民喜詩集』（文庫版）青木書店　一九五六（昭和三一）年八月）と記している。妻貞恵は、民喜にとって庇護者のような存在であり、譲治宅へも夫妻で訪れていたと考えられる。

書簡H8　〔一九三七[注1]（昭和一二）〕年六月二四日

［葉書］日本郵便二銭葉書
［筆記具］墨
［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷六丁目八六六
坪田譲治様

千葉市登戸二の一〇七
原　民喜

［消印］千葉／12. 6. 24／后8―12
［葉書裏面］
拝啓
先日は御多忙のところを失礼申上げました　何時も乍ら御高配

を賜はり感謝して居ります　あの翌日　伊藤氏を訪れ今度の雑誌の了解を得ておきました　猶ほ「文学生活」[注3]に私の小説が載ると申上げて居たのは私の聞きちがへでした

向暑の砌御自愛の程祈上げます　草々

六月廿四日

注1　この葉書の送付年は、消印から判別は困難であるが、千葉市登戸の住所が一九三六（昭和一一）年九月一五日に「寒川羽根子」から「登戸」へ変更されていることから、一九三七（昭和一二）年以降と推定され、本文中の雑誌『文学生活』が一九三六年六月から一九三七年にかけて発行された雑誌であることから、一九三七年六月二四日に記されたものと推定される。

2　「今度の雑誌」とは、書簡H7の葉書に書かれた雑誌『日本浪曼派』と推定される。（葉書の日付に近い発表作としては、一九三七年一一月に短編小説「鳳仙花」を発表した雑誌『三田文学』があるが、『三田文学』には同年五月にも短編小説「幻灯」を寄せているため、改めて了解を得る必要は考えられない）

3　雑誌『文学生活』は、浅見淵、伊藤整、尾崎一雄ら二十五人の同人で一九三六年六月に創刊された。浅見は一九三七年から編集に携わり、一九三七年一月号に「坪田さんの随筆集」を記し、譲治とは、家が近所で一九三五（昭和一〇）年頃に出会ったと記している。一九三七年四月号の編集後記には、伊藤整がほか四人とともに編集委員となって浅見を助けることになったと記されており、民喜は同誌の編集に携わっていた伊藤とのやりとりのなかで、何らかの行き違いがあったものと考えられる。

書簡H9　一九三七（昭和一二）年七月二九日（消印）

［葉書］日本郵便二銭葉書

［筆記具］墨

［葉書表面］東京市豊島区
雑司ヶ谷六丁目八六六
坪田譲治様

［消印］千葉／12．7．29／后4―8

［葉書裏面］
暑中御伺申上げます

「文芸春秋」を手に入れて「村は晩春」[注1]拝読致しました
後半をことに面白く感じました

昭和十二年七月

原　民喜

注1　譲治は一九三七（昭和一二）年六月に、小説「村は晩春」は、一九の場面から成っており、いずれも譲治の生まれ育った岡山県御野郡石井村島田（現・岡山市北区島田本町）を中心とする地域を舞台とした、譲治の少年期における実際の体験や印象から創作された作品であるといえる。

書簡H10　〔一九三八（昭和一三）年〕二月二八日

［葉書］絵葉書、二銭切手貼付
［筆記具］黒インク
［葉書表面］「（広島名所）井ノ口海岸」[注1]の白黒写真
［消印］判読不明
［葉書裏面上部］東京市豊島区
雑司ヶ谷
六丁目八六六

坪田譲治様

［葉書裏面下部］
拝啓
先日は御忙しいところ御邪魔にあがり失礼致しました「子供[注2]の四季」が了るまでは　なるべく御訪ね致さないつもりで居ります
何卒立派に完成させて下さい
御健勝を祈ります

二月廿八日

敬具

原　民喜

注1　井ノ口海岸は、一八九七年に広島から徳山まで開通した山陽鉄道の、広島駅から宮島駅へ向かう途中、己斐―五日市間（五日市駅は一八九九（明治三二）年開業）に位置し、男明神島と女明神島の夫婦島が浮かび、車窓から見える屈指の名勝として知られていた。一九三一（昭和六）年に、後に国道二号線となる井口村・宮島間の観光道路の建設が始まって女明神島が姿を消し、一九六六年から始まっ

た西部開発事業の土地造成により、男明神島付近も埋め立てられ、公園として整備された。（参考『井口村史』広島市、一九九二（平成四）年　『ふるさとの歴史』広島市井口地区社会福祉協議会、一九八〇（昭和五五）年四月）

2　小説「子供の四季」は、一九三八（昭和一三）年一月一日から六月一六日まで『都新聞』に連載された。

書簡H11　一九三八（昭和一三）年九月二四日

［葉書］日本郵便二銭葉書

［筆記具］黒インク

［葉書表面］東京市豊島区雑司ヶ谷
六丁目八六六
坪田譲治様

千葉市登戸二ノ一〇七
原　民喜

［消印］千葉／13．9．25／前8―12

［葉書裏面］

拝啓

其后は久しく御無沙汰致して居りましたが御変りは御座いませんか

先日波多野完治[注1]著「児童社会心理学」を繙いてみましたら先生の作品が沢山引例してありましたので懐しう思ひました

近日御邪魔に参上致したいと存じて居ります

敬具

九月廿四日

注1　波多野完治著『児童社会心理学』は、一九三八（昭和一三）年三月に同文館より発行された。当時新進気鋭の心理学者として注目された波多野完治の同著は、『児童生活と学習心理』（賢文館　一九三六（昭和一一）年）と、『児童心性論』（賢文館　一九四〇（昭和一五）年）と並び、戦前の三部作の一冊と称され、「旧来の児童観を論破し、児童を社会的に位置づける」児童研究における先見性がみられるとされる著書である（寺内礼「解題」『波多野完治全集』第七巻　小学館　一九九一年二月）。特に、この著書『児童社会心理学』「第九章　文学における児童観」において、譲治文学には「空想と現実を混同する子供と、欲求のままに、ひたむきに前進する子供」が描かれている

という児童心理の本質的あらわれの叙述に長じる点が指摘されている。この著書を民喜が自ら手にしていたことと、譲治文学について民喜はこの著書が指摘する側面からも理解を深めた可能性が注目される。

書簡H12　一九四四（昭和一九）年九月二九日

［葉書］日本郵便三銭葉書

［筆記具］黒インク

［葉書表面］東京都豊島区雑司ヶ谷
六丁目八六六
坪田譲治様

千葉市登戸町
二丁目一〇七
原　民喜

［消印］（千葉）／19. 10. 2／（?）

［葉書裏面］

謹啓

荊妻貞恵儀兼て病気療養中の處九月二十八日午前十一時二十分永眠致候　生前の御厚情を謝し御通知申上候　追て葬儀は郷里に於て営む筈に御座候

敬具

九月二十九日

注1　民喜の妻貞恵は、一九三九（昭和一四）年に結核を発病、千葉医大附属病院に入院するなどして病気療養していたが、結核・糖尿病のため亡くなった。享年三三歳、二人の結婚生活は一一年半であった。民喜は妻貞恵の死後、妻との思い出を多数執筆、妻の最期は短編小説「美しき死の岸に」（『群像』一九五〇（昭和二五）年四月）に詳細に描かれ、妻が息を引き取った直後からその骨壷を抱えて郷里へ赴いた場面などは短編小説「死のなかの風景」（生前未発表、『女性改造』一九五一年五月に初出）に著されている。そこには「『僕は茫としてしまっているから、よろしく頼みます』葬いのことや焼場のことで手続に出掛けて行ってくれる義弟を顧みて、彼はそう云った」などと書かれている。この葉書は、そうした茫然自失の状況下で記されたものであろう。

書簡H13　一九四八（昭和二三）年八月二五日（消印）

［葉書］日本郵便五〇銭葉書、一円五〇銭切手貼付

［筆記具］黒インク

［葉書表面］豊島区雑司ヶ谷
六ノ八六六
坪田譲治様

東京都[注1]千代田区神田神保町三ノ六
三田文学編輯部
原　民喜

［消印］23．8．25／（？）

プレスコード「検閲済」の丸印有

［葉書裏面］

暑中御変りございませんか
別便で饗宴[注2]八月号送りましたからお暇の折　読んでみて下さい
久振りに子供を題材に書いてみたのですが　つづけて[注3]書いて行きたく思つてゐます
涼しくなつたら　御邪魔に行きます

注1　「東京都」からの民喜の住所および「三田文学編集部」は押印されている。

2　民喜は一九四八（昭和二三）年八月、雑誌『饗宴』に短編小説「朝の礫」を発表した。民喜自身の分類で、幼年時代を描いた作品をまとめた「幼年画」に収められた一篇で、「幼年画」のなかでは唯一、戦後に執筆された作品である。戦前、民喜は主に二種類の小説を執筆した。庇護者であった父が生きていた頃の幸福な幼年時代を描いた「幼年画」と、死者と現世の入り混じった幻想を描いた「死と夢」である。義弟佐々木基一によれば、民喜は一九四五（昭和二〇）年二月には、作品を分類して、「死と夢」と「幼年画」という題名をつけてまとめており、一九五一（昭和二六）年の自死を前にして、「朝の礫」を「幼年画」に加えたという（佐々木基一「解説」（『原民喜作品集』全二巻、角川書店、一九五三（昭和二八）年三月）。

3　「朝の礫」以後、民喜は「幼年画」に連なる作品を描くことはなかった。それは、妻の死と原爆体験の衝撃が、当人の自覚よりも重く、民喜の人生と文学を変質させるものであったからであろう。

書簡H14　一九四九（昭和二四）年三月三日（消印）
［葉書］日本郵便二円葉書
［筆記具］黒インク
［葉書表面］豊島区雑司ヶ谷
六ノ八六六
坪田譲治様
東京都千代田区神田神保町三ノ六（注1）
三田文学編輯部
原　民喜
［消印］神田／24．3．3
プレスコード「検閲済」の丸印有
［葉書裏面］
御変りございませんか　一度お伺ひしたいと存じながら　御無沙汰しております
私の単行本（注2）が漸く　ほんとに漸く出来上りました
別送致しました　御高覧下さい

注1　「東京都」からの民喜の住所および「三田文学編集部」は押印されている。

2　民喜は、一九四九（昭和二四）年二月、原爆体験に基づく作品をまとめ、能楽書林より小説集『夏の花』を刊行した。このとき、民喜は四三歳、前年六月に雑誌『近代文学』の同人になり、一二月には「夏の花」で第一回水上滝太郎賞を受賞、雑誌『三田文学』の編集に携わりながら、創作に打ち込んでいた時期である。

【原民喜あて坪田譲治書簡】（広島市立中央図書館蔵）
書簡T1　一九四七（昭和二二）年七月九日（消印）
［葉書］　日本郵便一五銭葉書、三五銭切手貼付
［葉書表面］中野区打越町十三
平田様方
原民喜様
七月八日
豊島区雑司ヶ谷
六丁目一一八五
坪田譲治

［筆記具］黒インク
［消印］〔4字判読不明〕22．7．9．／東京都
［プレスコード検印］C．C．D　J―3812／7―11
［葉書裏面］
拝復
　おハガキ[注1]と雑誌有難う存じます。
御健勝の御様子何よりに存じます。
御高作早速拝誦いたしました。私には「忘れがたみ」[注2]がとても感銘深く、何か涙こぼるゝ思ひで御座いました。あのやうな短章をもっと〳〵読ませていたゞきたく存じます。あなたでしたら、一冊の本になるくらいはキットお書けになるやうな気が致します。

注1　民喜は一九四七（昭和二二）年七月一日の長光太あての書簡（定本原民喜全集Ⅲに収録）で、甥の部屋に引越ししたことを伝えており、六月頃、それまで住んでいた大田区馬込東から中野区打越町へ引っ越したものと推定される。民喜は譲治に転居通知も兼ねて、ハガキや雑誌を送付したものと考えられる。しかし、長への同書簡において、その部屋は「甥の休暇中貸してもらつてゐるだけで九月には又どこかへ引越さねばならない」と記しており、秋には同区内のアパートへ移っている。

2　民喜は一九四五（昭和二〇）年一月四日には、前年九月に亡くなった妻との思い出を表した短文を「忘れがたみ」としてまとめており、一九四六（昭和二一）年三月、雑誌『三田文学』に発表した。民喜が戦後最初に発表した作品である。

解題

原民喜と坪田譲治―幼年時代でつながった師弟

戦前に原民喜が師事したのは、伊藤整、坪田譲治、中島健蔵、佐藤春夫の四人と考えられる。伊藤整、中島健蔵、佐藤春夫は、民喜との出逢いや交友の思い出を書き残しており、既にその関係は明らかであったが、譲治と民喜はお互いの回想録を残しておらず、これまで二人の関係は不明であった。今回、それが双方の書簡により初めて明らかとなったものである。

民喜は、一九三五（昭和一〇）年一二月に短編小説「蝦獲り」を雑誌『メッカ』に発表、雑誌への寄稿を開始した。雑誌『メッカ』は、その前月の創刊号には譲治が「アンゼルセン随感」を執筆している。翌年三月には、民喜が「詩詠二章」を、譲治が

「日記抄」とアンケート形式の「わたしのメッカ・ぼくのメッカ」に一文を寄せ、同年五月には民喜が「青葉の頃」、六月には譲治が「親ごころ」を寄稿しており、同誌は、民喜が小説を初めて寄稿した雑誌というだけでなく、両者が執筆した雑誌であることから、二人は雑誌『メッカ』を媒介として出会ったものと推測される。

なお、『メッカ』に掲載された「詩詠二章」「青葉の頃」は、これまで民喜の年譜から落ちており、このたび確認して判明した。いずれも「かげろう断章」の「付録の散文詩」に含まれる詩篇で、「かげろう断章」は生前未発表、一九五六（昭和三一）年、『原民喜詩集』（青木文庫版）の初出である。

民喜が頻繁に譲治を訪れ、師事した時期は、一九三六（昭和一一）年頃から、妻が結核を発症した一九三九（昭和一四）年頃までの約三年間と推測される。それ以後民喜は、妻の病床に付き添う日々となり、作品発表数も減るため、上京して譲治の元を訪れる機会はほとんど無かったと考えられる。そして、民喜の人生と文学は、一九四四（昭和一九）年の妻の死と翌年の原爆被災で一変した。戦後は、当時の民喜の生活や文学状況からも、譲治との直接的交流は持てなかったのではないかと推測される。

まず、書簡Ｈ３、書簡Ｈ４、書簡Ｈ５、書簡Ｈ６からは、民喜が譲治を訪問する際、前もって自作原稿を送付しておき、面会した際に譲治から直接原稿に対する指導を受けていた様子が窺われることは注目される。また書簡Ｈ２および書簡Ｈ９では、民喜は譲治の小説や随筆に対する感想も伝えており、民喜が文学的出発の時期に譲治から受けた影響は看過できない。

民喜は一九三五（昭和一〇）年三月に詩的な短文をまとめた掌篇集『焔』を出版した後、幼年時代を描いた小説や現世と死者の世界の交錯する幻想的な短編小説を執筆し始め、作風は物語性を強めた。幼年時代を描いた作品は、民喜自身の分類で「幼年画」と名づけられ、短編小説「小地獄」を除く八編すべてが「雄二」という同一の主人公名で描かれている。＜物語性＞、＜同一の主人公名＞というところに、幸せだった子ども時代を基盤に小説や童話を著し、一九二五（大正一四）年から一九二六（大正一五）年にかけて「正太」を主人公とした一連の「正太もの」を執筆し、昭和期に入ると「善太・三平もの」に移行して作品発表を重ねていた譲治の影響を見ることができるだろう。両者とも、幼年時代を小説に著し、幼年時代への郷愁や幻想、病的な神経等の共通した作風の特徴をもっており、戦前の民喜の子どもを主人公に描いた作品が、譲治との交流のなかで育まれた

ものであったことが理解される。

そうした二人の交流を示す一例が、一九三八（昭和一三）年二月二八日に記された書簡H10である。当時、民喜は千葉に暮らしていたにも拘わらず、郷里広島の海を写した絵葉書を使用して、譲治に送っている。「（広島名所）井ノ口海岸」と印刷された小さな島の浮かぶ白黒写真の絵葉書である。民喜は絵葉書を送った前月に、「幼年画」の一編、短編小説「不思議」を『日本浪曼派』に発表した。その作品で、主人公の雄二は、初めて汽車に乗り、父とI島（厳島・宮島と推測される）へ向かう。雄二は広島駅から宮島駅へ向かう途中、車窓から初めて海を見る。その場面は「雄二は始めてみる海を眩しそうに眺めた。沖の方にはいくつもいくつも島があつて、緑色の水が一めんに続いてゐた」と書かれている。井ノ口海岸は、広島駅から宮島へ向かう途中の、己斐・五日市間に位置し、当時、男明神島と女明神島の夫婦島の浮かぶ、山陽本線沿線上の屈指の名勝として知られていた。また、民喜は、この頃の作と思われる詩「千葉海岸」の第二連で「あはれそのかみのぞき眼鏡に／東京の海のあさき色を／今千葉に来て憶ひ出すかと／幼き日の記憶熱をもて妻に語りぬ」（生前未発表、定本原民喜全集Ⅲ（一九七八（昭和五三）年一一月）に初出）と記している。民喜にとって、千葉の海は郷土の海の、幼年時代に初めて海をみたときの記憶へとつながっていた。民喜は、この詩で妻に熱く語ったと表しているように、譲治にも幼年時代の海の思い出を伝え、小説化した「不思議」も読んでもらっていたことだろう。文面で多くを語らずとも、このときの二人には充分に通い合う土壌が築かれており、絵葉書を受け取った譲治には、「子供の四季」の連載を応援する民喜の励ましが届いたものと想像される。

そして、書簡H7からは、譲治が民喜を雑誌『日本浪曼派』へ紹介している様子も窺われ、注目される。駆け出しの頃の民喜にとって、譲治からのそうした推薦は有難いものであったに違いない。

戦後になると、一九四七（昭和二二）年七月九日消印の書簡T1で、譲治は、民喜が妻との思い出を記した「忘れがたみ」を「涙こぼるゝ思ひ」というほどに寄り添って読み、「一冊の本になるくらいはキットお書けになる」とあたたかい言葉を贈っている。民喜の人生と文学は、妻の死と原爆被災により一変していたが、譲治からの民喜へのまなざしは変わらなかった。

一九四八（昭和二三）年八月、民喜は、幼年時代を描いた短編小説「朝の礫」を雑誌『饗宴』に発表し、八月二五日消印の書簡H13では譲治にそれを送っていることがわかる。文面には

次作への意欲もみられるが、妻の死と原爆被災の体験により人生の一変させられていた民喜には、牧歌的な幼年時代に帰することは叶わず、以後、「幼年画」に連なる作品を発表することはなかった。

その後、一九四九（昭和二四）年末で雑誌『三田文学』の編集を辞し、執筆のみに集中、経済的に行き詰まり、自死への傾斜が深まり、既に自死を考えていたと思われる最晩年の一九五〇（昭和二五）年から一九五一（昭和二六）年にかけて、民喜は「雄二」を主人公に童話を描いた。七編の童話は幼年時代の思い出を元に描いた「幼年画」とは異なり、象徴性の高い詩的な作風となっている。また、子ども向けの仕事として、『ガリバー旅行記』の翻訳にも取り組んだ。このように、死を前にして、子ども向けの仕事に向かったのは、民喜の文学が、譲治のもとで育まれた幼年時代に対する郷愁が基盤となっていた証であり、生活や将来の不安などのこの世の制約から自分を解き放とうとするとき、最後、自己のもっとも核となっている部分を世に提出しようとしたからであろう。

このように民喜にとって譲治は、慈父のような師であり、民喜の文学生活の出発点において、幼年時代を小説化する上で大きな影響を与え、励まし、導いてくれた師であったといえるのである。

（竹原　陽子）

坪田譲治にとっての原民喜との交流の意義

坪田譲治の側から、原民喜との出会いがもたらした意義について考えると、まず、原民喜が坪田譲治にあてて書いた書簡として、最も早いものとして確認されている書簡が書簡H1である。この書簡における日付けは、一九三六（昭和一一）年三月であり、この時点における出会いの状況について考える際、二人の年齢は、譲治四六歳、民喜三〇歳である。譲治は前年の四五歳にして、『改造』に発表された小説「お化けの世界」によって、ようやく文壇から注目されるようになった作家であり、さらに文壇で不動の位置を占め始めるきっかけとなる小説『風の中の子供』（一九三六年九月～一一月『東京朝日新聞』夕刊）や小説『子供の四季』（一九三八（昭和一三）年一～六月『都新聞』）が世の話題にのぼるよりも以前に民喜が譲治を訪れて「御教導下さい」と依頼していることは注目に値する。ここに、譲治は、世間的な評判によらず、自らの文学に対して本質的な理解と共感を持って慕ってくる民喜の姿に好感をもったことが推測される。

譲治の元に集った文学を志す若者といえば、まず早大童話会の学生たちがいる。早大童話会は、一九二二（大正一一）年に創設されていたが、一九三五（昭和一〇）年に早大童話会の岡本良雄や水藤春夫らによって依頼を受けた譲治は、この頃から顧問の立場で若者への児童文学方面での導きをするようになっていった。しかし、民喜はそのようなグループやその他の集団とは関係なく個人的に譲治宅を訪れているようであり、しかも民喜が書簡中に譲治の文学について触れているジャンルは、随筆と小説である。そのうえ、民喜は、小説において子どもや子ども時代を描くことについて、書簡H11のように、波多野完治による児童心理学の方面からも譲治文学が児童心理の小説であるとする理解を及ぼしていたことがわかる。さらに、民喜が書簡H13のように自らも「子供を題材に」書く小説を創作する思いについて譲治に伝えようとする気持ちのなかには、譲治文学の根底に、子どもや子ども時代に対する描写を通して生の本質を見極めようとする真意を汲み取っていたことが推測される。そうであれば、譲治を慕ってくる若手作家はまだ少ないなかで、譲治にとっての民喜は、譲治が力を注ごうとした小説における子どもの描写について理解を及ぼした数少ない存在の一人ということになる。つまり、譲治は、大正期には子どもを描く小説を中心に手がけてきたが認められず、昭和期に入って児童雑誌『赤い鳥』での発表が定着することで次第に児童文学作家として世間から認識されるようになり、民喜と出会った昭和十年前後は、譲治にとって再び小説家としての初心に立ち戻りながらも自らの子どもの描き方にこだわりを加えていく時代であったといえる。その文学が遅まきながら世間での注目を集めるようになったと同時に、民喜という存在が譲治の文学のねらいを理解しながら自分なりの思いを託してあとに続こうとする姿に接して、譲治は民喜への励ましの思いを強くしていったものと考えられる。

（山根　知子）

※今回の書簡発表に関して、坪田譲治の三男坪田理基男氏と、原民喜の甥にあたる原時彦氏には、公表のご許可とご協力を賜りましたこと、深謝申し上げます。
※書簡を所蔵する吉備路文学館と広島市立中央図書館には、調査研究のご協力をいただき感謝申し上げます。

（やまね　ともこ／本学教授）
（たけはら　ようこ／本学大学院博士前期課程二年在籍）

岡山における連母音の融合状況（2）
―「岡山市民調査」から見る―

尾　崎　喜　光

1. はじめに

「連母音」とは、子音を挟まずに母音が連続するものである。古代の日本語にはこのような音は無かった。しかしその後、用言の活用形において語中の子音が脱落する「音便」という発音上の変化が生じたこと、また中国から漢語を取り入れる際に原音に近い音すなわち漢字の音読みで取り入れたことにより日本語に連母音が生じた。現代日本語に続く代表的な連母音には［ai］［oi］［ui］などがある。しかし地域によっては、これらの連母音をさらに変化させ、［ai］や［oi］を［eː］などに、［ui］を［iː］などに発音する現象が見られる。たとえば「大根」をデーコン、「寒い」をサミーと発音するのである。こうした現象は「連母音の融合」と呼ばれる。上野善道編（1989）所収の言語地図によれば、近畿地方やその周辺の四国地方・北陸地方では融合させずに連母音のまま発音する地域が比較的広く分布しているのに対し、それら以外の地域では融合させる地域が広く分布している。岡山県は、北東部（美作）は近畿地方からの連続として融合させない地域が多いが、それ以外（備前・備中）は融合させる地域が多い。

尾崎喜光（2013）―以下「前稿」と称する―では、岡山県における連母音の融合状況について、筆者が本学で担当する「日本語学基礎演習」において学生たちとアンケートにより収集したデータを分析した結果を報告した。調査は2010年11月から12月にかけて行い、高校生以下の若年層を中心とする575人から回答を得た。分析の結果、形容詞や形容詞型助動詞の連母音（ただし厳密に言えばいずれも活用語尾における連母音）は融合者率が現在でも非常に高いのに対し、名詞や動詞の融合者率は現在ではきわめて低いというように品詞による違いが大きいこと、また全体として融合者率が高い形容詞でも語による違いも小さくないことなどが明らかになった。

しかしながら、分析対象とした回答者の母集団が岡山県のどの範囲の地域であるのかが十分明らかではなかったこと、また回答者の選び方も無作為というわけではなかったことから、品詞による融合者率の序列はおそらく実態を反映しているであろうものの、融合者率そのものは実態を正確に反映している保証はないという限界があった。そこで今後の課題として、調査対象とする母集団をきちんと定めた上で、抽出の代表性を確保すべく回答者を無作為に多人数抽出して調査し、数値的な精度を高めてゆく必要があることを述べた。

その後、この問題を克服する調査を企画する機会を得た。調査対象とした地域は岡山市である。すなわち、無作為に選ばれた岡山市民を多人数調査する機会を得た。調査ではさまざまな言語事象について質問したが、連母音の融合形の使用について問う設問もいくつか用意した。そこで本稿では、前稿の“続編”として、それを分析した

結果を報告する。

2. 調査概要および回答者の代表性の検討

本調査では、対象とする母集団を明確化し、岡山市在住者（岡山市民）とした。ただし年齢層については、調査協力の得やすさや回答の質を考慮し、調査当時 20 歳～79 歳である者という限定を加えた。性別は男女両方とした。

調査票および回答者に提示する回答票（選択肢が書かれたカード）は筆者が作成したが、調査の実査と集計は、競争入札により（社）新情報センターに委託した。実査は調査票を用いての個別面接法によった。

同社では通常 1 地点あたり 10 数名の回答者を抽出して調査を行なっているが、研究経費の制約から今回は 80 名程度の規模の調査を予定したことから、1 地点あたりの抽出人数を通常よりもやや少ない 10 名前後とし、調査地点数を 8 地点確保した。

調査（実査）は 2013 年 10 月 24 日から 11 月 4 日にかけて行った。調査期間は約 2 週間である。

調査を開始した 2013 年 10 月の岡山市の人口は約 70.4 万人であるが、区ごとの構成比は北区 41.4%、中区 20.5%、東区 13.9%、南区 24.2% である。今回の調査では、調査時の年齢が 20 歳～ 79 歳という幅を設けているため正確な数値とはならないが、8 地点をこの人口比に従い按分したのが、次の調査地点数一覧の右側の括弧内である。

北区：3 地点（3.3 地点）
中区：2 地点（1.6 地点）
東区：1 地点（1.1 地点）
南区：2 地点（1.9 地点）

小数点第 1 位を四捨五入して自然数にすると、その左側の実際の調査地点数となる。このことから、各区に割り当てた地点数はおおむね人口比に従って按分されていることが確認される。なお、各区内の具体的な調査地点は無作為に選んだ。

本調査の回答者数は 81 人であった。その内訳を区別に示すと次のとおりである。

北区：30 人（33.5 人）
中区：20 人（16.6 人）
東区：11 人（11.3 人）
南区：20 人（19.6 人）

右側の括弧内は、81 人を各区の人口比に按分した数値である。括弧内の数値と実際の回答者数を比べると、東区と南区は両者の数値がかなり近いが、北区は実際よりもやや少なく、逆に中区は実際よりもやや多くなっている。これは、先に見た地点数が自然数でなければならないという制約に起因する問題である。こうした実際との違いはあるものの、しかしいずれも極端な違いというほどではないことから、回答者数についてもおおむね各区の人口比に従って按分されていると言える。

回答者 81 人の性別内訳について、その母集団である 20 代～ 70 代の岡山市民（約 51.1 万人；2012 年）のそれと対比しつつ示したのが図 1 である。

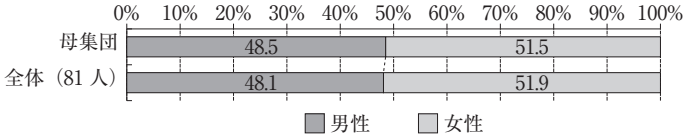

図１　回答者と母集団の男女比

これによると、回答者の男女比については、母集団とほぼ同じ比率で構成されていることが確認される。

同様に、回答者の年齢層別内訳を示すと図２のとおりである。

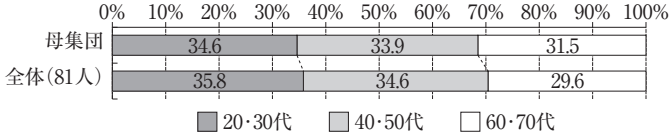

図２　回答者と母集団の年齢層比

母集団と比較すると、実際の回答者の方は 20・30 代および 40・50 代で数値が多少高くなっている一方、60・70 代で逆に多少低くなっている。母集団と比べ若い年齢層の回答が若干強く反映されるデータとなっているが、しかしこれも極端に大きな違いではなく、おおむね母集団と同じ比率で構成されていることが確認される。

回答者には自身の出身地についても、市町村レベルまでの回答を求めた。設問の中には岡山の方言形式の使用を問うものもあるが、その回答は、回答者の出身地がどこであるかにより異なることが予想されるためこのことを問うた。

回答を、岡山県かそれ以外かという分類で示すと図３のとおりである。母集団についてはこの種の情報はおそらくないと思われるため、回答者の情報のみを示す。

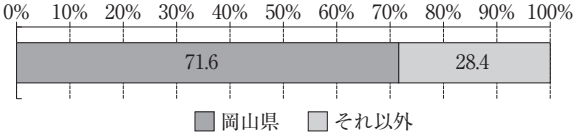

図３　回答者の出身地

これによると、岡山県出身者は約７割であることが確認される。本調査は岡山市民を対象としているが、回答者には県内他市町村出身者や県外出身者も当然いる。いわゆる方言調査であれば当該地域のネイティブのみを調査対象とするが、社会言語学においては当該地域全体としての言語状況を把握することを目標とすることから、母集団にノンネイティブが含まれているならば、回答者にも同じ比率でノンネイティブが含まれていることをむしろ望ましいものと考える。なお、本稿で分析対象とする連母

音の融合現象については、岡山県内にも地域差があること（美作地方では融合が少ない）、また県外でも融合が多い地域もあればそうでない地域もあり一様でないことから、以下では出身地別による分析までは行わず、回答者の地理的背景に関する情報として提示するのみにとどめる。

さらに、回答者が15歳までで最も長く住んだ場所についても同様に回答を求めた。言語習得が始まってから15歳くらいまでの期間を「言語形成期」というが、その間どこに住んだかによっても言語使用が異なることが予想されることから質問した。複数の地域で暮らしたという回答者もいようが、全てを回答してもらうのは時間がかかること、また分析の際もそこまで考慮して行うとなると事例的研究にならざるをえなくなることから、本調査では最も長く住んだところ（最長居住地）のみを回答してもらった。結果は図４のとおりである。

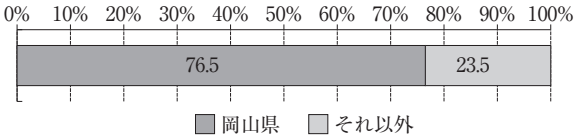

図４　回答者の15歳までの最長居住地

先ほど見た出身地と同様、最長居住地についても岡山県と回答した人が多く、8割近くいることが確認される。

すなわち、出身地についても最長居住地についても、岡山県を地理的背景とする回答者を7～8割含むのが本データであると言える。おそらく母集団も、おおよそこのような比率であると推測される。

以上をまとめると、母集団と多少の違いはあるものの、81人の回答者はおおむね母集団の縮図となるよう無作為に選ばれているものと判断される。すなわち、以下の分析で示す数値は、単に今回の回答者81人だけの数値ではなく、現在の岡山市民（ただし20代～70代）の言語状況をおおむね正確に反映した数値であると言える。

この回答者81人に対する実査（個別面接調査）は、委託した調査会社に所属する5名の調査員が行った。調査員5名の性別内訳は男性1名、女性4名、また年齢層別内訳は50代1名、60代3名、70代1名である。60代の女性が調査員の中心である。

3. 結果と考察

3.1. 各調査語の連母音の融合者率

今回の調査では、連母音の融合以外についても調査することとしたため、連母音の融合に関する調査項目数は一桁台にとどめた。調査では、前稿で明らかにした品詞による融合者率の違いを確認することに重点を置いたため、限られた項目数でさまざまな品詞を調査することを優先した。融合が生じうる主要な連母音には［ai］［oi］［ui］があるが、上記の目的を実現するためには、連母音の種類は一定にせざるを得ない。そこで本調査では、連母音の種類を基本的に［ai］に限定し、以下に示した語（ない

しは語句）を調査した。なお、前稿によると、現在でも融合形が盛んに行われている形容詞（ただし活用語尾）においては、語により融合者率に相当な違いも認められた。そこで、形容詞については調査語を特別に2語とし、融合者率が低かった語の代表として「アケー（赤い）」を、それが高かった語の代表として「ナゲー（長い）」を調査した。なお、動詞については、［ai］を含む語が少ないことから、［ai］に近い［ae］を含む「帰る」を調査語とした。また、名詞＋助詞については、助詞の部分は［i］に近い［e］（「へ」）とし、これに前接する名詞の部分は、岡山の音声的特徴として指摘されることの多い「コケー」（ここへ）の名詞部分の元の形である「ここ」とした。従って「ここへ」の連母音は［oe］となり、これのみ連母音の前半は［a］ではなく［o］となる。

デーコン（大根）……名詞
ケール（帰る）……動詞
コケー（ここへ）……名詞＋助詞「へ」
イッペー（いっぱい）……副詞
行キテー（行きたい）……助動詞（形容詞型）
アケー（赤い）……形容詞
ナゲー（長い）……形容詞

音声に関するデータは、調査者が回答者の音声を聴いて得ることを本来とするが、具体的な語について融合形を使うことがあるか否かについての内省であれば回答者が適切にできるものと判断し、回答者の内省報告により回答を得た。これは、回答者の内省により自記式アンケートで回答を得た前稿の調査と基本的に同じ方法である。

具体的な質問文と選択肢について、「大根」の場合を例に示すと次のとおりである。

野菜の「大根」のことを、自分でこのように言うことはありますか？ （ア）言うことがある （イ）言わない

回答者には、大きな字で「でーこん」と書かれたすぐ下に「（ア）言うことがある」「（イ）言わない」という選択肢が書かれたカード（回答票）を渡し、該当する方を選ばせた。質問文の「このように」とは、カードに書かれている「でーこん」のことである。調査では、調査員が「でーこん」と発音して質問する方法もありうるが、調査員により発音が不揃いになりうること、また融合しない発音でうっかり提示してしまう危険性もあることを考慮し、文字により音声を提示した。「行きてー」の「行」以外は全てひらがな表記とし、長音の部分は「ー」を用いた。

調査結果は図５のとおりである。グラフの数値は「言うことがある」と回答した人の比率、すなわち融合者率である。回答は二者択一であるため、これらの補数は「言わない」と回答した人の比率、すなわち非融合者率である。ただし、「コケー（ここへ）」のみ無回答が1.2%（1人）あったため、非融合者率は70.4%となる。参考として、岡

山県在住者を対象に調査した前稿の数値を【　】内に示した。名詞＋助詞は調査しなかったため数値が示されていない。

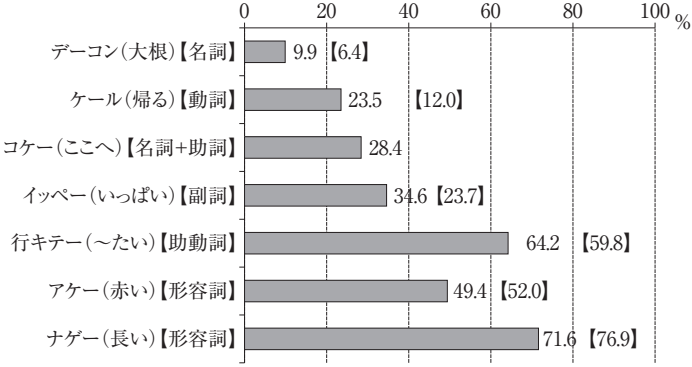

図５　各表現の融合者率（回答者全体）

これによると、岡山市民を対象とした今回の調査でも、前稿で見られた結果と同様に、融合者率は品詞によりずいぶん異なることが確認される。品詞による数値の序列は前稿とほぼ同様である。以下、品詞ごとに見て行こう。

名詞の「デーコン（大根）」の融合者率は、前稿では 6.4% と非常に低かったが、今回の調査でも調査語の中で最も低く 9.9% にとどまった。現在の岡山市における融合者率は非常に低いことが確認される。

これに対し形容詞は融合者率が高く、「アケー（赤い）」49.4%、「ナゲー（長い）」71.6% である。前稿では、「アケー（赤い）」52.0%、「ナゲー（長い）」76.9% であったが、「アケー（赤い）」よりも「ナゲー（長い）」の方が融合者率が高くなる傾向は今回も確認された。連母音はいずれも［ai］であり、ともに物の状態を表わし、長さも同じ 3 拍の形容詞であるにもかかわらずこうした違いが生じる原因については、現在のところ明確な理由は分からない。ただ、岡山県において安定した傾向であるとは言えそうである。この傾向は、連母音の融合が見られる日本のさまざまな地域においても共通して見られる可能性もあり、全国規模での地域間比較が今後望まれる。

助動詞の「行キテー（行きたい）」の「テー」も数値が高く 64.2% である。活用形が形容詞型であることから、形容詞と同程度の数値になっているのであろう。前稿では「～シテー（～したい）」という抽象的な形で調査したが、融合者率は 59.8% と高かった。今回の調査でも同様の傾向が確認された。

動詞「ケール（帰る）」は、前稿では融合者率が 12.0% であり、動詞全体としては名詞と同程度に低かった。今回の調査では 23.5% であり、名詞の「デーコン（大根）」と比べると数値は相対的に高くなっている。ただし、形容詞や形容詞型助動詞との数値の開きは大きく、それらと比較すると融合者率は明らかに低い。

副詞については、前稿によると、全般的には名詞と同様に数値が低い中で、状態を

表わしかつ語末が［ai］であることから形容詞のように意識して使われることがあると推測される「イッペー（いっぱい）」は 23.7% と相対的に数値が高かった。本調査でも「イッペー（いっぱい）」は 34.6% であり、融合者率は一定の割合はある。名詞等と形容詞等との中間として位置づけられる。

名詞の末尾と直後の助詞「へ」（実際の発音は「え」）が融合する「コケー（ここへ）」の融合者率は 28.4% であった。融合して発音する人は現在では少数派であるものの、名詞と比べると一定の割合いる。これも、名詞等と形容詞等の中間と位置づけられる。

今回の調査では、各品詞からの調査語を基本的に一語のみとしたことから、前稿の結果をも参照しつつ品詞間の序列関係を整理すると、現在の岡山市においてはおおよそ次のようであると言える。なお、形容詞（および形容詞型助動詞）といってもここでは活用語尾に注目している点、また副詞といってもここでは意味や語形が形容詞に近い語を取り上げている点には留意する必要がある。

名詞 ≦ 動詞 ＜「名詞＋助詞」≦ 副詞 ＜ 形容詞型助動詞 ≦ 形容詞

3.2. 融合者率の男女比較

以上では回答者全体としての傾向を検討したが、次に回答者を男女に分けて分析するとどのような傾向が見られるかを検討しよう。分析結果は図６のとおりであった。

これによると、全ての調査語において、融合者率は女性よりも男性の方で高いことが確認される。融合形を用いる人の割合は、全般的に女性よりも男性の方が多い。岡山市において融合形は、多少男性的なニュアンスを含む語形であると言える。首都圏在住の大学生 399 人を対象に 2005 年にアンケート調査した聶星超（ジョウセイチョウ；2006）でも同様の男女差が見られたことから、連母音の融合が行われている地域において現在共通する特徴であるのかもしれない。

注目されるのは男女差の度合である。女性の数値を基準にしたとき、男性の数値がその何倍であるかをグラフ中に【　】で示した。

これによると、融合者率が全体的に高い 4 語はその数値が低く 1.1 ～ 1.6 倍であり男女差はそれほど顕著でないのに対し、それが低い 3 語は数値が 2.0 ～ 4.1 倍と大きく男女差が顕著である。すなわち、どの語においても融合者率は男性の方が女性よりも高いが、全体として融合者率が低い語（＝名詞、動詞、「名詞＋助詞」）は、それが高い語（＝形容詞、形容詞型助動詞、副詞）よりも男女差の度合が大きいという傾向が認められるのである。現在融合形を用いる人が少ない語で融合形を用いるのは主として男性である、ということになる。

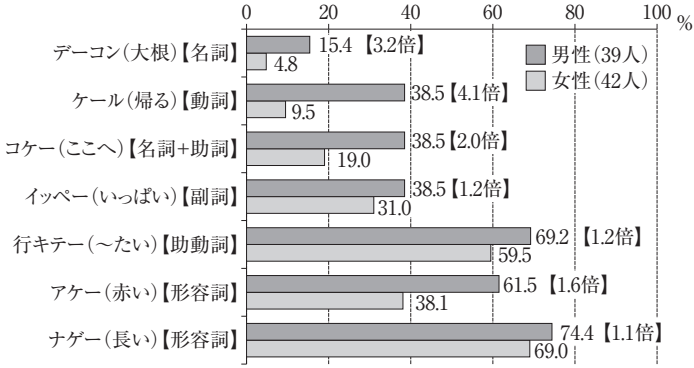

図６　各表現の融合者率（男女別）

3.3. 融合者率の年齢層比較

次に、回答者を年齢層に分けて分析した結果を検討してみよう。分析結果は図７のとおりであった。なお、年齢層は10歳刻みでなされることが多いが、今回の調査では回答者が81人にとどまることからここでは20歳刻みとし、「20･30代」（29人）、「40・50代」（28人）、「60・70代」（24人）の３層とした。

これによると、形容詞と形容詞型助動詞では、若年層ほど融合者率が高くなる傾向がほぼ一貫して認められる。これらの品詞においては連母音の融合が現在一層普及しつつあることが、年齢差として現われている可能性が考えられる。

これに対し、融合者率が全体として低いそれら以外の語は、顕著で一貫した年齢差は認めがたい。融合者率はそれぞれの語においてどの年齢層もおおよそ同程度といってよい状況である。岡山の伝統的な言語状況を一般向けに解説した青山融（1998）によれば、形容詞等と同様に名詞や動詞も連母音が融合して発音されることが記述されている。それを考えると、おそらくかつてはこれらの品詞においても融合形を用いる人の割合は相当高かったものと思われる。それが現在では大きく衰退しているのであろう。そのような衰退が生じつつある場合、高年層では融合者率が比較的高く保たれる一方で、若年層では融合者率が低くなり、一貫した年齢差を伴うのが通常である。そのような年齢差が明確には認められない点は少々不思議である。高年齢層でもじつは衰退があり年齢を問わず一様に衰退した可能性や、若年層で先行して衰退した後（つまり少し前には年齢差が認められた）高年層でも衰退が生じて数値が若年層に近づいた可能性などが考えられる。

以上をまとめると、形容詞や形容詞型助動詞では融合形がおそらく一層普及しつつあるため若年層になるほど数値が高くなる一方で、名詞や動詞等では融合形の衰退が年齢を問わず現在かなり進行した結果明確な年齢差が認められないまでに至っている可能性が考えられる。

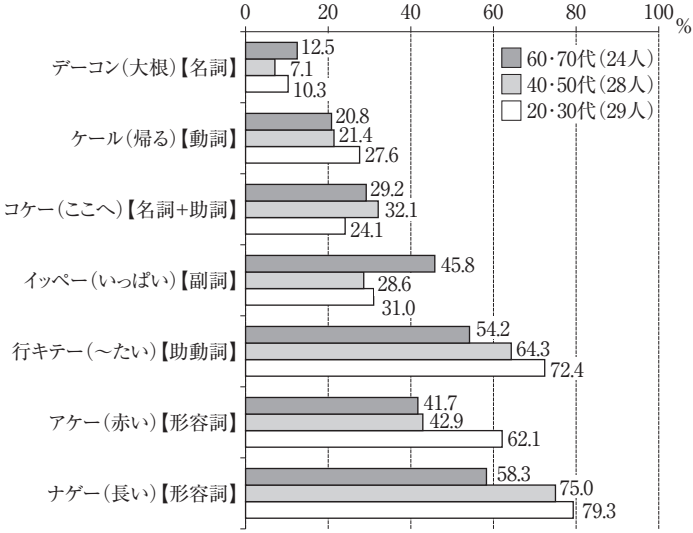

図７　各表現の融合者率（年齢層別）

3.4. 融合者率に関する項目間の関係

以上では調査項目を一つずつ分けて分析・比較したが、次に項目と項目とを関連付けて分析してみよう。つまり、「大根」をデーコンと発音すると回答した人は、「帰る」もケールと発音すると全員回答したというような何らかの規則性が認められるのか、それとも「帰る」についてはケールと発音すると回答した人も多数いればそう回答しなかった人も多数いるというように規則性などは特に認められないのかという点について検討する。調査語は７語であるので組み合わせは 21 通りあるが、ここでは、融合者率が低い「大根」（名詞）と「帰る」（動詞）の関係と、逆にそれが高いが語による違いが明確に見られた「赤い」（形容詞）と「長い」（形容詞）の関係の２組の組み合わせに注目して分析した。

(1)「大根」（名詞）と「帰る」（動詞）の関係

分析結果は図８のとおりである。

まず、融合形で一貫している人（デーコン／ケール）、連母音で一貫している人（ダイコン／カエル）、一貫していない人（デーコン／カエル、ダイコン／ケール）の比率に注目して結果を見てみよう。

グラフによると、連母音で一貫している人の割合は約７割と非常に多いこと、それに対し融合形で一貫している人の割合は１割にも満たず非常に少ないことが分かる。名詞にしても動詞にしても現在融合形を使う人の比率は少ないが、両方とも融合形を使う人となると、現在ではかなり少数派となっている。残りの約２割は一貫していな

い人である。一貫していない人の割合は相対的に少ない。

これを男女別に見ると、女性は連母音で一貫している人の割合が約９割と非常に多い点が注目される。男性もその割合が最も多いものの、いずれかを融合形とする一貫していない人も４割と少なくない。この点が男女で大きく異なる。

さらに年齢層別に見てみよう。20 歳刻みで集計することで年齢層を３層にとどめたものの、各年齢層への所属人数は少なめになるため数値の安定性が下がる点には注意が必要である。グラフによると、一貫した顕著な年齢差は認めにくいが、20・30 代になると融合形ないしは連母音で一貫した人の割合が減少し、主としてダイコン／ケールというパタンで一貫しない人の割合が増加しているように見られる点は注目される。今回の調査では対象に含まれていないが、さらに下の年齢層でどのようになっているかが興味深い。

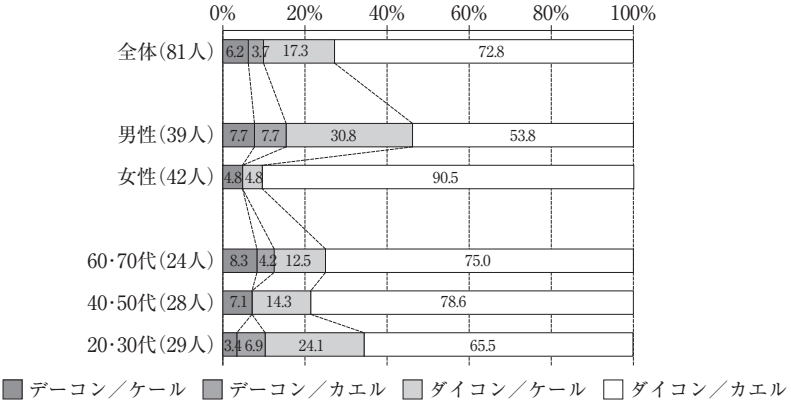

図８ 「大根」と「帰る」の融合者率の関係

次に、「大根」をデーコンと発音した人（左側の２つの凡例；なお、厳密には「発音すると回答した人」だが、以下では「発音した人」とする）が、「帰る」をケールと発音したか、それともカエルと発音したかという観点からグラフを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、いずれかへの顕著な偏りは特に認められない。これを男女別に分析した場合も、数値自体は男女で異なるものの、各性別内においてはいずれも偏りは認められない。年齢層別に見た場合も、各年齢層への所属人数が少なくなり数値の安定性が下がるという事情もあり、明確かつ一貫した傾向は認めがたい。以上をまとめると、「大根」をデーコンと発音した人は、「帰る」はケールもあればカエルもあり、名詞を融合形で発音することが動詞の語形を規定するというようなことは特にないと言える。

一方、「帰る」をケールと発音した人（左から１つめと３つめの凡例）が、「大根」をデーコンと発音したか、それともダイコンと発音したかを見てみよう。全体的な傾向を見ると、デーコン／ケールよりもダイコン／ケールへの偏りが認められる。男女

別に見ると、女性はいずれも連母音とする割合が非常に高いという事情もあり、ダイコン／ケールへの偏りは男性において顕著である。年齢層別に見ると、若年層になるほどダイコン／ケールへの偏りが増加する。以上をまとめると、「帰る」をケールと発音した人も、「大根」はデーコンよりもダイコンと発音した人の割合の方が高いこと、すなわち動詞を融合形で発音しても名詞は連母音で発音する人の割合の方が高いことが分かる。

逆の方向からさらに分析してみよう。「大根」をダイコンと発音した人（右側の2つの凡例）が、「帰る」をケールと発音したか、それともカエルと発音したかという観点からグラフを見てみる。まずは全体的な傾向を見ると、ダイコン／ケールよりもダイコン／カエルへの偏りが認められる。男女別に見ると、ダイコン／カエルへの偏りは女性において非常に顕著である。年齢層別に見ると、いずれの年齢層でもダイコン／カエルへの偏りが見られるが、20･30代の若年層になるとその度合がやや弱まる。以上をまとめると、「大根」をダイコンと発音した人は、「帰る」もカエルと発音する傾向が女性を中心に顕著であり、名詞を連母音で発音することは動詞も連母音で発音することを規定するという傾向が認められる。

最後に、「帰る」をカエルと発音した人（左から2つめと一番右側の凡例）が、「大根」をデーコンと発音したか、それともダイコンと発音したかを見てみよう。全体的な傾向を見ると、デーコン／カエルよりもダイコン／カエルへの偏りが著しく認められる。男女別に見ると、特に女性はいずれも連母音とするダイコン／カエルしか見られず、ダイコン／カエルへの偏りは女性において顕著である。年齢層別に見ると、一貫して顕著な違いは特に認められない。以上をまとめると、「帰る」をカエルと発音した人は、「大根」の方はデーコンよりもダイコンと発音する人の割合の方が非常に高いこと、すなわち動詞を連母音で発音することは名詞も連母音で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に女性においては、この調査で見る限り、そのことを完全に規定しており、いわゆる「含意尺度」（implicational scaling）となっている。動詞を連母音で発音することは、名詞も連母音で発音することを著しく含意しているのである。つまり、動詞を連母音で発音するのであれば、名詞もほぼ当然連母音で発音する、ということになる。

名詞と動詞の関係について要点をまとめると次のようになる。

名詞を融合形（デーコン）で発音する人は、動詞は融合形（ケール）もあれば連母音（カエル）もあり、特にいずれかに規定するというようなことはない。しかし、名詞を連母音（ダイコン）で発音する人は、動詞も連母音（カエル）で発音するという傾向が認められる。

一方、動詞を融合形（ケール）で発音する人も、名詞の方は連母音（ダイコン）で発音する人の割合の方が高い。さらに、動詞を連母音（カエル）で発音する人のうち非常に多くの人は、名詞も連母音（ダイコン）で発音する。

すなわち、名詞および動詞において全体として優勢である連母音は、両者を組み合わせて分析したところ、個人レベルにおいても優勢であることが確認されるのだが、連母音がより優勢である名詞を連母音で発音することの方が、動詞を連母音で発音す

ることよりも、個人レベルにおいて連母音を使うことのより強い基盤・前提となっている、と言える。

(2)「赤い」(形容詞)と「長い」(形容詞)の関係

分析結果は図9のとおりである。

まず、融合形で一貫している人(アケー/ナゲー)、連母音で一貫している人(アカイ/ナガイ)、一貫していない人(アケー/ナガイ、アカイ/ナゲー)の比率に注目して結果を見てみると、融合形で一貫している人が約5割と最も多いことが分かる。この残りを、連母音一貫している人と、一貫していない人がほぼ同じ割合で分け合う形となっている。注目されるのは、一貫しない組み合わせにおける関係である。アケー/ナガイがわずか2.5%にとどまるのに対し、アカイ/ナゲーはその10倍の24.7%を占め、後者への大きな偏りが見られる。つまり、融合形の使用について一貫性がないといっても、融合形と連母音のいずれが使われるかはフィフティーフィフティーという形で一貫性がないのではなく、「赤い」はアカイであるのに対し「長い」はナゲーという形で、すなわちこの両語についてはアカイ/ナゲーという組み合わせとしてかなり予測可能な形で一貫性がないのである。

これを男女別に見ると、男性は融合形で一貫している割合が約6割と半数を超えるのに対し、女性は3〜4割にとどまり、融合形で一貫している人の割合は男性の方がかなり多いことが分かる。では、女性は連母音で一貫する割合が男性よりもかなり多いかというとそうでもない。男性と比べ女性でかなり多いのはアカイ/ナゲーである。つまり、男性は「赤い」も「長い」も融合形とする人が大きな割合を占めるのに対し、女性は「長い」については男性と同様に融合形とするが、「赤い」は融合形と連母音に分かれるという形での男女差が見られる。

さらに年齢層別に見ると、若年層になるに従い融合形で一貫する割合が増加し、逆に連母音で一貫する割合が減少する傾向が見られる。特に高年層である60・70代と若年層である20・30代との違いが顕著である。これは、形容詞において融合形がより一般化する変化傾向が年齢差として表れている面が少なくないと考えられる。中年層である40・50代は、その上下の年齢層と比べると、アカイ/ナゲーを中心とする一貫しない割合が増加する点が注目される。すなわち、融合形への変化はいずれの語にも一様に進むのではなく、基本的に「アカイ/ナガイ」→「アカイ/ナゲー」→「アケー/ナゲー」のという形で、つまりまずナゲーが先行して一般化し、それを追う形でアケーが一般化するという順序があることがこの図から読み取れる。図5で見られたアケーとナゲーの融合者率の違いは、融合形が普及し始めた順序の違いが反映されている面が少なくないと考えられる。

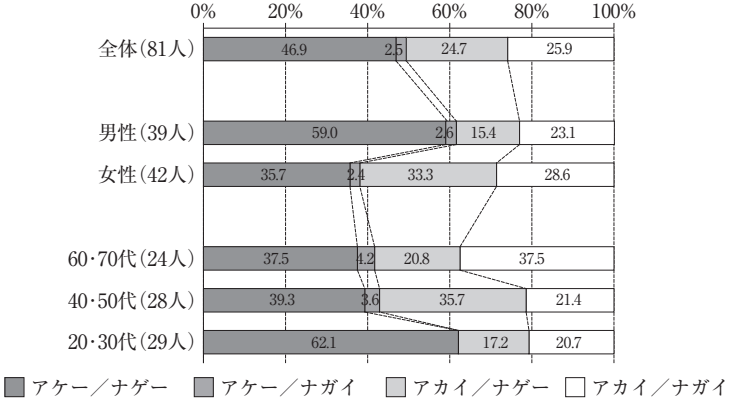

図９ 「赤い」と「長い」の融合者率の関係

次に、「赤い」をアケーと発音した人（左側の２つの凡例）が、「長い」をどう発音したかという観点からグラフを見てみよう。まずは全体的な傾向を見ると、「長い」をナガイと発音した人の割合は極めて小さく、ほとんどの人はナゲーと発音していることが分かる。男女別に分析した場合も、数値自体は男女で異なるものの、「長い」はナゲーに著しく偏っている点は同じである。年齢層別に見た場合もこれと同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「赤い」をアケーと発音した人のうちのほとんどは、「長い」もナゲーと発音していること、すなわち同じ形容詞の中でも「赤い」を融合形で発音することは「長い」も融合形で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に 20・30 代においては、この調査で見る限り、そのことを完全に規定しており「含意尺度」となっている。つまり、「赤い」を融合形で発音するのであれば、「長い」もほぼ当然融合形で発音する、ということになる。

一方、「長い」をナゲーと発音した人（左から１つめと３つめの凡例）が、「赤い」をどう発音したかを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、アカイ／ナゲーよりもアケー／ナゲーへの偏りが認められる。男女別に見ると、アケー／ナゲーへの偏りは男性においてより顕著である。年齢層別に見ると、20・30 代の若年層で同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「長い」をナゲーと発音した人は、「赤い」もアケーと発音する傾向が特に男性や 20・30 代を中心にある程度認められ、先に見たこの逆の関係ほど強い傾向ではないものの、「長い」を融合形で発音することは「赤い」も融合形で発音することをある程度規定するという傾向が認められる。

逆の方向からさらに分析してみよう。「赤い」をアカイと発音した人（右側の２つの凡例）が、「長い」をどう発音したかという観点からグラフを見てみる。まずは全体的な傾向を見ると、いずれかへの偏りは特に認められない。これを男女別に分析した場合も、男性は「長い」をナゲーよりもナガイに、女性は「長い」をナガイよりもナゲーに発音する傾向が多少見られるものの、その違いは顕著というほどではない。

年齢層別に見た場合も、明確かつ一貫した傾向は認めがたい。以上をまとめると、「赤い」をアカイと発音した人は、「長い」はナゲーもあればナガイもあり、「赤い」を連母音で発音することが「長い」の語形を規定するというようなことは特にないと言える。

最後に、「長い」をナガイと発音した人（左から２つめと一番右側の凡例）が、「赤い」をどう発音したかを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、「赤い」をアケーと発音した人の割合は極めて低く、ほとんどの人はアカイと発音していることが分かる。男女別に分析した場合も、また年齢層別に見た場合もこれと同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「長い」をナガイと発音した人のうちのほとんどは、「赤い」もアカイと発音していること、すなわち同じ形容詞の中でも「長い」を連母音で発音することは「赤い」も連母音で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に20・30代においては、この調査で見る限り、そのことを完全に規定しており「含意尺度」となっている。つまり、「長い」を連母音で発音するのであれば、「赤い」もほぼ当然連母音で発音する、ということになる。先ほどの分析と合わせて考えると、「赤い」を融合形で発音するのであれば「長い」もほぼ当然融合形で発音するし、逆に「長い」を連母音で発音するのであれば「赤い」もほぼ当然連母音で発音するということになる。

形容詞の「赤い」と「長い」の関係について要点をまとめると次のようになる。

「赤い」を融合形（アケー）で発音する人は、「長い」も融合形（ナゲー）で発音する傾向が著しく認められる。また、「長い」を融合形（ナゲー）で発音する人は、「赤い」も融合形（アケー）で発音する傾向が、男性や20･30代を中心にある程度認められる。一方、「赤い」を連母音（アカイ）で発音する人は、「長い」はナゲーもあればナガイもあり、「赤い」を連母音で発音することが「長い」の発音を規定するということは特にない。さらに、「長い」を連母音（ナガイ）で発音する人は、「赤い」も連母音（アカイ）で発音するという傾向が著しく認められる。

すなわち、「赤い」におても「長い」においても全体として優勢である融合形は、両者を組み合わせて分析したところ、個人レベルにおいても優勢であることが確認されるのだが、融合形がより優勢である「長い」を融合形で発音することが「赤い」を融合形で発音することの基盤・前提となっている一方で、それが相対的に劣勢である「赤い」を連母音で発音することが「長い」を連母音で発音することの基盤・前提となっている、と言える。

4. まとめ

本調査で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

前稿で見られた結果と同様に、融合者率は品詞によりかなり異なることが確認された。名詞や動詞は融合者率が低い一方で、形容詞や形容詞型助動詞はそれが高いことなどが確認された。序列関係はおおよそ次のようである。

名詞 ≦ 動詞 ＜「名詞＋助詞」≦ 副詞 ＜ 形容詞型助動詞 ≦ 形容詞

男女別に分析したところ、全ての調査語において、融合者率は女性よりも男性の方

が高いことが確認された。男女差の度合については、融合者率が全体的に高い語は男女差が顕著でないのに対し、それが低い語は男女差が顕著であるという違いが観察された。全体として融合者率が低い語で融合形を用いるのは主として男性である。

年齢層別に分析したところ、形容詞と形容詞型助動詞では、若年層ほど融合者率が高くなる傾向がほぼ一貫して認められた。これらの品詞においては、連母音の融合が現在一層普及しつつあることが年齢差として現われている可能性が考えられる。これに対し、融合者率が全体として低いそれら以外の品詞では、顕著で一貫した年齢差は認められなかった。高年齢層でもじつは衰退があり年齢を問わず一様に衰退している可能性や、若年層で先行して衰退した後に高年層でも衰退が生じて数値が若年層に近づいた可能性などが考えられる。

「大根」(名詞) と「帰る」(動詞) を関連付けて分析したところ、次のことが分かった。名詞も動詞も融合形を使うという人は、現在ではかなり少数派となっている。男女別に見ると、女性は連母音で一貫している人の割合が非常に多い。これに対し男性は、いずれかを融合形とする一貫しない人も少なくない。

別の観点からの分析によると、連母音がより優勢である名詞を連母音で発音することの方が、動詞を連母音で発音することよりも、個人レベルにおいて連母音を使うことのより強い基盤・前提となっていると考えられる。

同様に、形容詞の「赤い」と「長い」を関連付けて分析したところ、次のことが分かった。「赤い」も「長い」も一貫して融合形を使う人は約5割と多い。男女別に見ると、男性は「赤い」も「長い」も融合形とする人が大きな割合を占めるのに対し、女性は「長い」については融合形とするが「赤い」は融合形と連母音に分かれるという形での男女差が見られる。また、年齢層別に見ると、若年層になるに従い融合形で一貫する割合が増加し、逆に連母音で一貫する割合が減少する傾向が見られる。これは、形容詞において融合形がより一般化する変化傾向が年齢差として表れている面が少なくないと考えられる。その進行の仕方は、年齢層別の分析から推測すると、まずナゲーが先行して一般化し、それを追う形でアケーが一般化するという順序があるものと考えられる。

別の観点からの分析によると、融合形がより優勢である「長い」を融合形で発音することが「赤い」を融合形で発音することの基盤・前提となっている一方で、それが相対的に劣勢である「赤い」を連母音で発音することが「長い」を連母音で発音することの基盤・前提となっていると考えられる。

以上、今回の調査で得られたおもな知見をまとめた。岡山市民を対象に調査して得られたこの知見が、融合形を使う日本の他の地域においてもおおよそ同様に認められるか否か、すなわちこれらの知見が現在の日本における一般的な傾向であると言えるか否かの確認的調査が、この先必要な作業の一つであろう。今後の課題としたい。

参考文献

青山融（1998）『岡山弁 JAGA!』（アス）
上野善道編（1989）『日本方言音韻総覧』（小学館、非売品）

尾崎喜光（2013）「岡山における連母音の融合状況―多人数調査から見る―」『清心語文』15
聶星超（2006）『「連母音の融合」と男女差の関係における調査研究－主に若者を中心に』（北京外国語大学修士論文）

付記

本稿の分析で用いたデータは、2013年度学内助成金（研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」）により得たものである。調査結果の一部は、2014年3月13日付の『山陽新聞』（夕刊）の「岡山弁の使用傾向は？」として、また2014年4月14日付の『読売新聞』の「手伝ってもらっていい？」という表現に関する記事として紹介されている。

（おざき　よしみつ／本学教授）